題芙叙

世之所謂諧者流之言。
雅俚淫俗。其擬情
發志動物感人者。往、

有焉。斯編徵和歌題
林抄。廣拾近代歌題。
而聚之。每題數十首。
合數千首。可謂勤矣。



其中可喜可樂之處
笑可絶倒者。種々情
態。一一而出。悲哀此
編非唯便好俳諧者

# 題叢序

あるひとのいはくこの書をさまざまの人に示すに
六のうち四方はあつてのつぎ國はあるいは流ち
ゝをきゝまたは笑ひの實はうるはしくゆゝしくまた悲しき
たゝみはうるはしくかゝるものゝ方はよろこ



# 二の竹供解頤嘖飯

之具三五兩。

鵬齋老人識

乃至ようて言葉いやき発るわゝき雪
をとゝ家かゝるあれたの新るもたたひとさい
その誹諧といふなんゝなる此誹諧といふ
言葉のとゝ一代の歌ゝ仕新るあゝを中
むゝの越ゝ似ゝ歌ゝ新ゝ新ゝ
和似ゝ連歌ゝあゝ白のゝ仕歌ふゝ



かをたゝゝ歌ゝあゝ仕歌ゝ新ゝ
ひゝ名をゝ集の誹諧歌ゝもゝて
半ゝのゝやゝ仕ゝひるゝみれゝん歌
ゝのゝゝゝ歌ゝ新ゝあゝ
ちゝ祖をゝゝ仕ゝゝ言のゝ
ゝふゝゝゝ国ゝあゝ集ゝゝ

いとひ出るなきハ蜀の法のたゝもかたゝもを
ふるくなれたるものなれハ法ハ不達いとあぬあるぬ
やうにたなるふるまひ世ふるふを種乃
かたゝ所をなるいつるをきさいとも法ハ
底まれる如なたつめるぶ桃李法ハ人ものを
いとゝき学のたゝめこたゝいるふるをもいるよの乳

この世興ハ世ふるこゝもたゝて相とふ墨をこゝ月ハも
のふゝ国ゝ学めゝゝ世あるき世ハ世をゝくゝ世を入て
法ハなるゝこのこゝもたゝ和といとゝうるふなん乗ハ
たるゝとき人ハゝも世ゝとゝ世ゝ人ゝこの法ハは
世ふゝあゝんなるの世ゝ世ゝかゝゝ度世ゝ法ハるふ
なの世ふゝゝのゝたゝ世ゝ世ゝゝる人ゝつゝ

なるものの物の利いとなるうり祝三好出るる才のまし
羅びなってくるかくもつたゆゆるものいつまるなる
元この書はそれかものてよることるるこうれ
のまをそらしめわさいかをて三れるとあ三ゝ法
こうん事三りるほつるるこをろうの大きしりつも
いまめおを好るるとしたいあ出吟

えてとゝのへたるゆゑにたゞかなをかゝ
てすあるこゝろぬといへとかゝるやうに
つゝもの書ふさはしかきものまゝにた
かとまゝ字の事あるかまこゝろをかゝ
又ぬしを涼くゐまきるあるをもいとあ
るおもきゝとおもふよる人をあちぬ小かき

るこゝろまてこの書法ゝ論こゝろをつくる
ゝ為むいてゝ此こゝろ理のそこ
そこゝろをしんいこゝろ理をえぬよいつゝ
のみち先ず人をんこゝろ人なれ行ひる
なこゝろよのゝをよたのそを好る人こゝろこゝ
ぬるこむこゝ

いなかにはあるまじ

ちりかゝれ





凡例

一貞享元禄の比芭蕉翁世に出て風雅に俳諧をなし
てあまねくは其門の風士をしてふれかれよりはかれに及び
拾ひ集めてとりなしてハ諸集にわかれはしま集まりて
子弟二三匠加へて其よりこみ此ころしまして其わかれ
としよりし匠又延享明和の頃より名匠諸国に
出集して月花をうつしけることの多く数つもりにたりし
かはあれと機末にのほりたる貴賤の身にはらくそれ
ましますは此匠先書の花鳥にしてこそ世に開えところ
人々先句をまなひ拾ひて八秋の季寄の其ましくれたる凡例
をうえやすからんやうにとかくあつめはへりのもの也

一題の場合に井手氏の[illegible]みを月宮殿[illegible]等
をもてさる共[illegible]に植えの[illegible]植れたるに生類
ハ[illegible]歌[illegible]人共や[illegible]ともに[illegible]おほ[illegible]
なるべし

一古人[illegible]共[illegible]を出[illegible]を集[illegible]用れ[illegible]
を[illegible]より拾遺[illegible]人の白い[illegible]
[illegible]に[illegible]れ拙撰[illegible]
[illegible]して[illegible]めし[illegible]生涯の作を[illegible]
此箱集[illegible]より[illegible]
再撰[illegible]の[illegible]と又[illegible]撰[illegible]
一白頭古人[illegible]
[illegible]



一貴賤の[illegible]へ入[illegible]歌の撰集より
[illegible]

一風雅[illegible]の[illegible]
[illegible]

一集中[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
老[illegible]
一古人の名[illegible]
此[illegible]世の[illegible]
[illegible]

一雅名字初代國沉吟紀十郎義[illegible]
[illegible]
同名の人士[illegible]
一改名したる人の名[illegible]
[illegible]
一夫人今[illegible]貴なる松の[illegible]
第[illegible]
此[illegible]
[illegible]



# 俳諧發句題叢春總目録


春之上

四方 加　臘月 二　元日　明ら年 三
歳旦　立春　物空　物日 四
物霞　物鶯　今日春　明け春 五
今日春　神代春 六　君ヶ春　花春
春風　老春　家春　松春
年玉　物夢　物春 七　吉慶
紙國制樹　年德棚　四方拜　東風
門餞 八　注連飾　歯朱　門松
飾縄

餅白
雑煮九
蓬莱
福茶
物寅
馬茶始
松離
水祝
若菜
松の内
万歳
越廷
屠蘇
喰積
物暦
席次
弓始
謡物
子日
七種十三
飾焚
大黒舞十五
德俵
歯固
螺者十
書物
二日
新茶始
芳用
小松曳十二
蒔雛十四
松迎
鳥追
若水
太箸
庭竈
寒積
二日
着衣始十一
年男
人日
蒔粥
若夷
春物
俄俄師
物芝居
掘〻
若餅
総曳十七
福寿草
蒔
下萌
芝芽廿
梅廿一
浦梅廿二
縣召
破魔弓
家曳
福浦
席忌
蕗蕾
仏の座十九
ホトケノザ
木芽
月桂梅廿八
野梅
猿曳
遣羽子
奄下
粥杖
木地炉祝
水菜十八
ヨメガハギ
藁蕾
物芝
蕨芽
夜梅三十
垂梅
國栖奏十六
手毬
鏡餅
左義長
店卸
節
学業
若芝
角組芦
折梅卅一
宿梅卅三

散梅　遲梅
松花 卅五　柳 卅六
雪 四十三　百子雪 四十九
蛤 五十一　蝋
龍蕨 五十二　海苔
余寒　春霞
殘雪 五十五　久霞 五十六
海霞　霞
春雪 六十一　雪解
春霞 六十三　春霞
霞　春霞
紅梅　松若緑 卅四
刺柳 四十一　椿 四十二
白魚　蜆 五十
獺祭魚　養父入
海雲　若和布
消遥 五十三　霞 五十四
春霞 五十七　水霞
山霞　殘雪 六十
春風 五十八　雪汁
雪解　氷温
凍解　山笑 六十四
佐保姫





二月 六十五　夜更着　二月夜 六十六　鬼押祭
物年　事納 六十七　彩雲　二月雲 六十八
温樂會　西行忌 六十八　嵯峨柱松　北野山業祭御供
貝寄風　猿塔會　彼岸　浴殺年酒 六十九
獺祭 七十　獺祭 七十　春霞 七十一　春夜 七十二
春霞 七十四　鷹化鳩 七十五　鐵尾鷹　伯勞
消ル　多勞　多文　多巢
警巢　巢立多　雛子 七十六　燕 七十八
貝多 八十　巣多　警　豹多
松老多　春鶯　帰厂 八十一　雲雀 八十三

雀子　春多 八十六
牝　蝶 九十
蠶 九十四　蜻蛉
古瓦子　地虫
孕麻　麻蔴角
物雷　物虹
燒野　山燒
苗代　水口多
麻苧　種芋
蕨　古華
胡葱　蒜
蝶 八十七　蟬 八十九
蝶子 九十三　田螺
飯鮒　奇居虫
猫魚 九十五　春麻 九十六
陽炎 九十七　糸接 九十八
紙力考　公代 九十九
田打 百　烟草
種下 百一　種苧
木實接　獨活
扶菜 百二　蓼菜
庵杖　さいつま





茅芽　茅子若葉
蒲公英　蒌 百三
大根花　茅萱葉
茄子苗　五月茅
接木　菊植
彼岸桜　物桜 百八
彼岸桜 百十　糸桜 百十
三月 百十一　弥生
雛多 百十二　茅餅 百十三
汝于　女良多 百十四
峯入　嫁娘御身拭
上巳　菊合
菊取　曲水
永日 百十五　青食
壬生念仏
遲日 百十六

春日 百十七　春色　春夕　餘寒 百十八
長物　若菜摘　桑摘　菓子 百十九
令法　山櫻 百廿　櫻 百廿二　糸櫻 百廿五
夕櫻　夜櫻 百廿六　散櫻 百廿七　八重櫻
遅櫻 百廿八　花 百廿九　花鳥 百卅五　花雲
花色　花笑　花風　花雨 百卅六
花雪　花雪吹　花見 百卅七　折花 百卅八
花守　落花 百卅九　桃 百四十　梨花 百四十二
海棠　辛夷 百四十三　躑躅　山吹 百四十四
木瓜花　沈丁花 百四十五　木蓮花　榎花
庭櫻　李花　連翹　馬酔木





樒花　五加木　櫻草　櫻麻
蘩蔞（ハコベ）　菫 百四十六　芹花 百四十八　青麦
三月大根　三月菜　茗荷竹　春菊
蒜 百四十九　水草生　萍生初 百五十　蛇出穴
田鼠化成鶉　麦鶉　燕巣　鳥帰
雲入鳥　呼子鳥　引鴨　櫻鯛
初鶉　若鮎　春牧　別霜
春露　春雨 百五十二　春人　春山 百五十六
春光 百五十七　春海　春水 百五十八　夏隣 百五十九
春夜　夜遊　惜春　春別
春暮　行春 百六十　三月尽　春雑 百六十三

# 俳諧發句題叢春上

椿丘太節輯

題叢春

□月

□月の色ふるうり小盗人　伊勢　樗良

□月や女義のもの思ひめ　京　閑更

□月も三つる迄れ人古し　公

□月や高燈ふけゆる生臥　丶几董

□月も月の雲ぬぎすてゝ　伊勢　青川

□月や火桶抱て梅ぬれ花　尾張　琪六

□月のうゝ門田ふ余り色　常陸　有篁

□月の灯光るや海の家　浜名　仲六

□月ちゝれ営のうゝ孔　畿　可都里

月やゆくあるじのあるこの家　　宋屋　月化
月はいとれいらんなく月出る　　江戸　道彦
月の家もいとうらやましき　　〃　雪笠
月の雪深う寂ふるたちまち　　〃　蕉雨
掃き下ろす月の主ぶり　　甲斐　崑外
月もものびやかなる耳の垢　　江戸　護物
月や鶯のすまひのまをおり　　信濃　瑞馬
月もはるかの嵐れ　　江戸　旦く
潮里の月寄り貝の売　　尾張　梅雨
月は雨のかるるを拾ふ　　信濃　若人
月もこるる月かる屋あれ　　陸奥　大呂

月やゆくあるものは松さうち　　筑後　其成
月の風ふれて拍尾ふ　　丹後　義本
月や山家の柿ものかぶ　　〃　可盈
里のやゆ月ゆめ　　江戸　老鶴
月も昼ゆ家桂　　〃　泉帰
月やうかわかの清け　　相模　松乙
月をうちれ寒　　江戸　素撲
月に寂のぼる雨　　伊勢　推巳
月やきのぼるまよあ　　陸奥　一水
月は松ふおはる旭　　若狭　寿卜
月は出の簾ふる　　美作　亀文

睦月

元日

年かゆくられいに人来る睦月哉　常陸　松江

春きたりて門やむ月の小女房　尾張　曉雲

元旦やそまよりの人あるそく　江戸　白雄

元旦や大樹のもの人ん　肥後　閑更

元旦やこのんにて世さみしし　筑前　綺石

元旦きれてふ東に来にけり　筑前　大江丸

元旦のおしてあるの人哉　江戸　春亜

元旦の様言問ふる裏ふい　江戸　梅人

元旦や雪ふれ消て松の風　尾張　爵堵

旅人も来よ元旦のその庵　武蔵　無説

朝日やひさしかの母よりまの中

元旦もゆくそのの扉哉　陸奥　成美

元旦やうもちの向やる母の京　陸奥　冥々

一ゆの元旦きそそはひれ　道貴

元旦や逢も忘る唐こそ　摂津　一草

元旦や也ふくの名きいめん　丶　魯隠

元旦や四つに重ねの食　京　蒼虬

元旦やいつ重ねの白きれる　筑後　双鳥

元旦やれもふくく山の形　常州

元旦や見えそよむ椀の音　筑前　晩翠

人の来て元旦する菴哉　下総尾　素月

元日たつや嵐の夢の間に　信濃　一茶
たつ三ツ葉葵の家　尾張　士朗
門車ながれて春たつ旦　江戸　葵亭
月雪やとぢの内なる春たつ　近江　亜流
日ぐれまとしれぬ春たつ　出羽　五貢
先いそぐ月やまつ源氏　一茶
あるべきものとて立つる風流れ　伊勢　椿堂
まゆ玉つやつやしらむ松の朝　近江　申白
やはらかの人ぐつまたつ指ひ　江戸　鳥碎
初春やよろこぶ雲の道ひろ　伊勢　羅印
門もたるまの光ひ

立春

初春

初日

初春ふもとの山ふ
初春庭あれ郷ふの天ま
初春の山ハ位をおはめ
初春や書ものぬ
初春のひゆ
天の戸ふ松ふ
日の光ふ
門車ふて
大仏の三つ
芝を拾ふ人も
松のけを大車ふ

信濃　素堂
肥前　一茶
京　吾友
下総　路一
尾張　風夏
伊勢　蕪村
伊勢　波庚
尾張　大江九
近江　松兄
　　琪道

君が代を千歳の句ひ初の新
春やはの松の根ゆ初る新
大そのの梅しやの句ひ初る新　陸奥　素郷
うれひつてもめでたく初る新　京　雪笠
松井ふるやそのかたち初る新　河内　古卯
てれう初るあ出る松芝　伊豫　楚山
初鶯の鳴やかれる富士　江戸　蘚山
初ちやうつれはあ鳥うれ　年心
人も多し深しんやそは初　春蛾
初鶯わつれぬ時ぞはれく　晩菫
一ぱりふるしみ年や初雪　下総　重原
　　昭九

初鶯

初雪

初雪ていい書うれ　越後　一川
華の松ふあ一朱の初雪　江戸　美兼
海ふをむすそ食や初雪　　春亜
松いつも蝶ゆれそさつ雪　下総　双樹
碁ふまけてはうあうの初雪　　成美
梅さくさはうる初雪　　一草
ふふ仏のこの松木も初雪　江戸　年心
やうくと雪ふあていふると　　寒松
はもと勢一あるうふ雪初雪　下総　月晩
松の木ハ河ふやさつ雪　　昭九
あるらふ食ふめ仏のまこ

いのちより心ほそくまひけのまと　江戸　完素
ヲひとつや四照の華もけのまと　一草
まらくとかるゝ名ちるれやむのまと　道義
今朝のまと七草のまと奴の乳房をあらくり　晩菫
すくすくる花ちゝ洗んと朝のまと　摶良
掲ふ碁の音おんと朝のまと　蕉太
赤蕃い東向ちりと朝のまと　京　都萍
今朝のまとそそ逢そ抱　伊勢　摶堂
逢ちもの洗ちくるの春　尾陸　岳輪
うつくしお人のんやと朝のまと　三河　喜春
太郎冠ちゝ咲ちと朝のまと　常陸　卜甲

御代のまと
今日のまと
花のまと

花のまつれちゝまのあれいそ　浪花　梅渡
人の人を蛙こうりつ御代のまと　京　犬左
ちのまと伽まれちゝめたれ　江戸　柳居
投入の乃ちも面白ふのまと　京　可楽
ありちゝはめて当ふのまと　大江丸
ふのまとん赤新又ちやちつよ
二日のつ月も尺るちりふれまと　倚石
俗尺くてそれのまと　士朔
ちゝ伝いせを引猫のふのまと　琪六
あくくちるゝ蛙まふのまと　摶堂
猿とけふ咲ちるありふのまと　信濃　孟義

ほのぼのと屋根のあはやふのまき　江戸　菜兆
ぬけてゐる板屋よりすてふのまき　成美
花のまゝ咲てちるやさくらの枝　寒松
笑の花をたゝへあけてふのまき　蒼虬
いおるちまき胸よれ葉てふのまき　陸奥　秋夫
見てゐる雷ちらりと赤みれ葉　近江水口　志宇
ふのまき痒おやつてものゝ久　常陸　不脱
新の手ぶるやうはよるのまき　陸奥　几憑
松ゝ乃う嬉ゝいでゝふのまき　尾張　不轉
神の手捕ゝ歳ゝ歩みてゝ　晩菫
分ハ下ゝの佛ゝに数ゝ思うまき　丈左



神のまき
君のまき
松のまき
蕃春
老のまき
物まき

ゆさゝゝと山のうたゝ木を分のまき　一草　加賀
はゝゝと最ゝほれて松のまき　斗入
物のゝらゝ沸ゝや蕃のまき　樗堂
世を猿の物すゝ蕃のまき　相模　葛三
蕃のまき葉ゝ〻るほゝゝ氣し　一茶
遠葉のゝ山ゝ物ゝまん老ゝ花　京　蕪村
物まゝ老ゝ人のまゝほゝゝ人　晩意
二ゝたゝこゝるゝ立ゝ山ゝ花ゝゝ　伊勢　丘高
物まゝハ葉実ゝ木ゝ物ゝ為ゝ　道光
物まゝ月夜ゝ人ゝの敵　一茶
物ゝ花ゝ月ゝ蛙ゝ物ゝはゝ　寒松

停慶

年玉

初夢

初東風

初ちやふ台に月ハ乃つれ　信濃　春唄

借みらく入むつぢぱしめらん　暁雲

鮫ふ出す白をはみて佐登らん　道彦

年玉の笑をふらつき歓ひ里　江戸　宗瑞

ぼう菴やゑ佐の年玉らふくる　一茶

年玉民探をはさる木の手らん　葛三

年玉のあらしふつかり竈の肩　江戸　護物

初夢やころかれちうハ歓の宴　栗波　宜學

ちゆ夢や浩なての包ふふ寄　護物

初夢やゆすらかかなる女かれ　備中　巻一

初東風や月上許埴も民の教　午酔



東風

祇園削掛

年徳棚

四方拝

門松

初東風やころに吹ハ月もえ　一草

初東風や崩のあけるあの松　山城　美九

庭さへて東風あへかおおらん　年心

松萩も東風ありれるかもまほ辺らん　道彦

識て選て笑ふやるゆりのけ　甲斐　重行

年柳や二日礼者の木のけ　清水　星譜

春中をふみ出ちやれ四方拝　藏六

門松のさけり泉中のこゝらん　存更

松立て入のけさんふ家らん　斗入

二日して崔かれらり門の松　常笠

折しゃかれも門松ふぞい　一茶

門の松やはるれてこゆるとし　晩翠
うちて帰るつけうつ餅　篤志
注連飾　思めたちそれ籠まをする　蒼帆
歯朶　松の歯朶のうるはへう　雪笠
餅縄　輪ふらや松ふまつぼみける　道夫
ちつとんて　古れ風あり餅縄　法水
餅の内　年代のうしもれしのうち　紙洛
掛延　まの門隠ふめるつり金　双鳥
穂俵　穂俵を捜す鼠も恥ぶの孔　法水
若水　ふれふ志めぬ出る歯ふの孔　伊勢
ふふや松の下ふて火のうふ　石鼎
　　　　　　　　　　　　　　　　江戸
　　　　　　　　　　　　　　　　大和
　　美美
　　彌山

雑煮

三椀の雑煮のあるやもふ松
椀ふ腸ふけて雑煮ふ　茅村
志つふ　や雑煮ふる和一時　伊勢
炉のふふ三ふ　ふふのふふふふ　蘆又
ちふ完ふふ　おもめ原蘆のふ松ふ　外六
いそ汲や松を支る新二人　江戸
嘘あてるふや歯ふめ刎け　俳無
ふ使ふふ　一松ふ　上総
大そふや刎ふ　大の母　一醒
大はふや大ふふふふふ　大の扶　大和
大ふふふ同ふ　ふふの扉ふ　外の
　　　　　　　　　　　　　　　　丈左
　　　　　　　　　　　　　　　　焼業
　　　　　　　　　　　　　　　　兆蕙
　　　　　　　　　　　　　　　　完来
　　　　　　　　　　　　　　　　蒼帆

屠蘇
歯固
大箸

たはたをふく　雪堂　京

蓮葉や天ふかぬ　也　徐　伊勢

蓮葉や赤ふるひたるのゝめ　宗居

蓮葉や赤ほうれるのちつ寺　可都里

蓮葉の門ゝ　一草

蓮葉ふ面ゝ　蕉雨

人の世の蓮葉ハ来の林ゝ　一茶

蓮葉の赤ふあつ出る嵐ゝ　秋瓢　三河

蓮葉や母の強ふ出る夜を寒て　文角　越後

蓮葉ふ世捨ゝ　子人　陸奥

喰つゝやこ西の味を覚そめ　五湖　筑前

喰積　柳居

螺青　梅雨　伊戸

庭竈　其雲　加賀

猫蓮葉　千代女　加賀

猫蓮葉や赤ちりさ寺　尾張

猫蓮葉の出ゝ　紙雪　尾張

ゝ出ゝ　宗雨　伊勢

蓮の搦ん抜ん　蓮葉　伊勢

猫屠蘇ゝ　安南　下総

出すゝ抜出ゝ　都雀

重箱の敷ふ　蓮葉

ふ物や紙ふ　方明　三河

二ふ物ゝ　蓮葉

初寅
唐津

初寅や院〳〵ハまる寄籠　治郎　月居
ほたゝらハ松の葉よりもる雨　南更
けふ津や又起されて寒し　歳郎　蒙洲
二日
えるハ嬉しハ物　丈左
えるれとうの心こゝろ二ハ　素礫
えるもこるよりはこるの月　出羽　五明
三日
初雪ハいつも松ゆるこるハ　道夷
三ヶ日立ちまの物もく　治郎　七高
馬乗始
ゆるさしめ巴ハ吹引添ぬ　信濃　猿左
弓始
七国さの国あてさしめや弓始　播磨　三日坊
紀乗始
けふのく毎の門松ひらすと　護物

着衣始
松雛ふ
謡初
蔵開
年男
初祝

福ふくらのちハはおそれぬ　伊勢　春汐
松雛の四ハ利ふ松雛ふ　、　鷲溝
松風おるハ松風ふ謡ぞめ　成美
きめてれ也めれ仕初蔵開　美巣
探欲や家も持ぬ義ひ年　一草
年男　蔵王　雪江
ぞ蔵の君破〳〵ち年男　河内　流来
ぞりもよむ人ぬをてゝ男　葵太
義勇ハ門まこのやの祝ひ　白雄
こうすれ世ふ鶴あてふ祝ひ　連奥　祇川
一ふのそれのはるやれ祝　紙男　計ふ
玄関より女ぬけて祝

五月

春このゝの松脂ぬかるゝ
嶮しやめくれ引ゝ出るゝ　尾張　閑更
撫子紅畑の松てゝ　也有
春立て深まるそれ　江戸　保吉
傳無てゝ入やるの尾ゝ　大左
先ひゝ接ん通るゝ　成美
古寺てゝ嶮ゝ唐のゝ　蒼軌
豆畑のあゝに鬼のゝ　道美
蚊の火ゝ松き別てあるゝ　奇淵
乳の作ゝ多ゝ初ゝん　葛三
ゝら暮ゝ松ゝ迷ゝ初ゝ　下総　素迪



小松曳

ゝのゝん小独ゝ行ゝ　江戸　素琉
松風ゝ吹ゝ　尾張　鹿野
ゝを添てゝ雲ゝ松の影
日のゝの松てゝ松曳　近江　紫昌
ゝゝは松てゝ松曳　尾張　如尺
ゝゝひゝん孫ゝ松　信濃　月居
汁の実や小松曳ゝ　素梨
火を焚て行ゝ小松曳　蕉雨
泛涙おてゝ月やゝ小松曳　護物
小松曳鄙のゝ　江戸　素桃
母のあゝむ月ゝ　陸奥　乙二

人日

## 若菜

人のるや女の中へ敬み拝ぶ　蔦三
人のる其方の幸する仏あり　蕉雨
人のうらめしきまま履ぬ　乱れ
人のるやそまつ月ハしの上　拝伏　吳老
見れつゝ人ふるれ色つゝ　晩蕾
おのふりふやあるる菜ハ　博良
私の百に接てゝ　向雄
其菜ぬ拝て来ると　相撲　春鴻
ふりけ詠えれの菜つゝ　伊勢　虎國
里人のあるめてつゝ菜ハ　保古
其菜賣却り旬を出ハ　如明



老つゝ其菜を人のうひる　士朔
色の其方ぬ菜の畑道　仝
寄ゝの菜を人ゝ其れ寄する　井六
ゝゝの尺ゝ其まて菜接　陸奥　菜居
其菜の畑ゝ文　道老
弱のゝほのゝを菜賣　尺文
学と二人おつゝ菜れ　一草
嵐畑の私あるする菜ハ　奇閑
雪ゝ人四男のゝゝ菜ハ　雪雄
其庵や梅を見れハ菜畑　出羽　阿藏
ゝゝ其の菜ゝ　篤老

七種

鄙ぶりハ月にもよしや若菜摘　仝　雄渕

若菜れハ中々菘にねる若菜売　蕉雨

かんしおれなも若の汲来ぬ　浪花　万和

若なつむ籠にこぼれぬ氷かい　若人

人の世と打わりて能わり若菜かな　尾張　大蘿

雪やけの若菜問はんに若菜売　秋夫

若菜摘や河もたくさん人の里　甲斐　鱗守

覚ひ初るの子は未だ若菜哉　常陸　李尺

神ぬつりせる若なき宗かな　三河　而羽

七くさや袴の紐の片むすひ　蕪村

七くさに嵐も立てまくれ　几董



薺打

七くさの声も鶏か声とられけり　保古

七くさや先来るけれまその音　竒渕

七くさや梅の下道松の岳　长角

七くさやさはつかぬ牛の角　越後　坐嘯

きを里に又とよあり若菜哉し　越後　双鳥

若菜粥

と鈍ん若菜をやすも君か為　閑更

憶くうろも憶若菜の声　向雄

若菜をや人まを鶏のつよかり　標堂

日ひかれぬれハ若菜の声したし　蓁亭

若菜もはるや松かせ波の声　下総　菊阿

喰ひかれや若れハさひしい若菜哉　鶯笠

松の内　羅風　出石　扶石
飾樊　椿堂
松過　江戸　任口
若戎　陸奥　道堯
万歳　江戸　文何
　　江戸　不角
　　　　待石
　　　　道堯
　　陸奥　東宣
　　　　柳居

万葉の頃もきまあ〜きゝ孔
雀の巣ゝ縄先ゝ立ちまつ
雀の巣や掾竜の餐ゝ重も
雀の巣やさしかゝるのまつの友
雀の巣ハ孫ゝ孫ゝ伝ゝる
雀の巣ハはゝ子をまつする小ゝ
雀の巣やそゝ嬢ゝのひゝ裏ひ
雀の巣の先作法ある屋ゝ
大ゝ行ゝ世る過ての雀の巣
雀の巣の若ゝ貴ゝ松そゝり
雀の巣やかゝるゝを素ゝ乗る

白雄　江戸　素性
一草　陸奥　化
道堯　江戸　三
素槃　赤帆
月化　養帆
蔦三　一茶
一茶　蕉雨
蕉雨　陸奥　秀

大黒舞

鳥追

春駒

傀儡師

懸石

猿曳

萬歳の己が徳も戸口かな　尾張　徐英

日あたりや里萬歳の木履　上野　箏露

萬歳や子持鼠も出て見れ　常陸　由之

駒鳥に大黒舞を見せにけれ　、　遅月

鳥追や村の広さて宮の月　大和　亀水

春駒やよいの子持るに庭の花　京　太紙

懐鳥に付添れて傀儡師　安藝　玄蛙

鳥羽屋の梅もぬれつゝ傀儡師　常陸　湖中

ひやり理屈らぬ奴なし懸石　葵太

鞭とりて左縄し猿舞し　仝

猿曳や鞭の先なる人心　完来



国栖奏

物是居

破魔弓

遣羽子

うき世とて猶もかるゝや猿舞し　月化

あれは猿も西月に猿かな　摂津　玉居

猿曳かれも深山の木立かな　蕉雨

猿曳にとしまするや舟わたし　長崎遊女　左門太

犬が尋ねて舞ふてくるなり猿の猿　常陸　知彰

舞猿に思ふ何をか枝ゆかし　、　瓢翠

西掛けていつも柳の花見れ　揮堂

今年も破魔弓にて物是居　成美

そもそもや花とるや山の家　摂津　東明

やりはごや打ちて代茂の友かな　重厚

羽子突や乙女のかみのゆきもなし　素迪

手毬　汁椀　鶴　成美
もりく　やあ　八幡　乳の根　重厚
変曳　宝曳の景　やまの雪　素玩
番下　ちりこんて　番下
鏡餅　焼餅　姫　瑞馬
若餅　餅　ちこ　梅の花　焼萱
餅　餅　餅　一茶
稲　杖　鶴老
粥　杖　成美
左義長　杖　几董
雪の有　尺文





硯曳　左義長のお里ふあるる　里人
序忌　碧の八束穂より金　蔡太
碧川や去年の八束穂より金　護物
碧川のよろこ附　完来
碧川のうろ　松の風
碧川の清　苔の水
まり柳のうく　苔の清　苔村
大おれる雪の後　信濃　撃堂
うゆしく　忌籠　希言
柳咲て本地の梅の匂ひ　瑞馬
本地柳孫　素卿
庶卿　丈左
福寿草　以巡

## 蕗薹

福寿草二本并て咲よりわ
咲しかもそれ〻あるわ福寿草
歌とその中ふ咲〻わ福寿草
福寿草この和の名のあるハ義れ
蓉とハなれも老〻れ義の薹
よりも〻や老てふさ〻義薹
魚籠の片海を旬義の薹
義の薹々更ひを出れ
夕ゆや折る海ハ〻る義薹
義薹ものはめさ〻れ九ま
ひの孔ゆてゆ数の古義の薹

肥前 尺文
江戸 菖三
甚映
白来
菖村
五鬼
保古
大江九
道尤
安房 一草
斗白



## 水菜

常陸 文川
乙二
武蔵 千尋
菖村
几董
保古
若義
摂津 一草
広坊
道尤
公

命あ〻て〻ふ〻咲〻わ義の薹
川の〻ふの水菜に〻まの水菜ふ
芹浅ふ海ふ〻義の〻海れ〻わ
〻れ〻ふて徑尋〻ふ〻わ芹の平
あ〻れ越れ沢や芹の二重重
帰ふ居や芹ふて孤ひ芹の文
芹の和の揺ふわ河一義加重
泥条の葉人を見〻わ小田の芹
溝川のすんて流〻わ芹の上
〻ふ芹の海里条仏のあち〻側
芹て〻れ〻わ〻ふの〻海の端

## 菊

雪ながらかくれて菊の蕾むあはれ　雪柱
小姫菊の根の木末まで思ひ掘　摂津　桐柄
菊の根の枕ふ庭の霜　陸奥　萬象
菊ひろん雪踏の反の歩るも　甲斐　樹村
菊責鉢の泡場を数へ　京　中樵
京しまれ臥中てあへて菊責　攝戸　晩蕾
菊責ふるかなる泡吳ん　信濃　青蘿
菊ぞやろんくそなくへ　柳莊
悼九の庵ふ菊の歩　能登　莫二
鉢ふもも泡ふる紀菊ふる　道夜
その根ハひもふ菊ハ　伯耆　屋高



## 仏の庭

蝋梅寺
雪菜
下胡

仏の庭ふ紀花庭ふ紀
仏の庭ふ紀蕊掘てふ和　出羽　春鴻
庭ふて乃ふ二月のあふ萩　五駒　祐昌
つむふてもまハあけほの雪菜　成美
大蕊ふ大戦ふるふそのふん　春城
急猫ふ鄭れて菊ふる蕊の菊　成美
その戸ふ物ふそ寺むる　乙二
雪乱も立ふまる寺紀菊ふる　上野　芽九
下菊のちふふ雀ハ　三河　木芽
菊立ふ鶏庭ふ曙ふ紀　晩蕾
ふ人ふつんてふ紀菊立菜　常陸　道傳

## 物草

[illegible]

道堯　和煙　春鴻　貸春　士明　叙来　道堯　管笠　椿堂　武陵　文兆

## 著草

[illegible]

摂津　丹波　信濃

## 草芽

[illegible]

梅河　井徳　夫山　鬼平　攜堂　和煙　五明　成美　吳山　白年　拌臼

## 木芽

[illegible]

卓郭　武義　常陸　越中　卓郭

梅

藤の芽

角組芦

白梅や古寺の苔を分る旭の影
雪の木深し寺の木の芽哉
そよ吹てそよ吹ぬ木の芽哉
木のめ出て若葉の雨の粉
咲かるる花に押あつ木芽哉
旭の木芽哉
筋骨のそり出て蒙の芽立哉
芦の芽に丁の古書ちらつくや
よしの山やおもふの角のあてもなし
多の郎は梅も尺くれ芦の角
梅ゝに人の求めぞ蛙哉

奇淵
護物
梅岡
法水 鈴鹿
鈴苔 古瀾
方水
曉雲
車大
加賀 傳爽
青良
樗良



白梅や寺毎に尺くれ残る
梅ちるや河内の国の寺毎
義士の古巣に巣ゝて梅の花
梅園ふ揮しするるれ
梅ゝや蒼くさまある徒 腦
梅かゝや髪掛ゝる紙ゝ
梅を尺て花ほのぼのと白
大ゝかる梅の木枯て梅の花
伝へ一の唐や梅のつゝひ道
梅ちるや尋ぬ坊仙の寺
松ゝして又寄るまゝや梅の花

仝
千代女
蕪村
仝
曉雲
周更
青蕪
几董
城原
江戸 左門
芙蓉

梅の実の熟して落るを
かつらと向梅の実天竜
坂うちを過ぬ春の梅の
梅ゝにあつゝ周の林の
鶯や清水や梅の
梅はくもや清をのぶるはめ
向梅や定家文庫の古ひや
ほゝ乃ゝ梅ゝ梅の毒の
梅ゝにおけて時きん笹の雪
去をあゝに毒咲ぬ行
毒のふ老ゝるゝ

出羽 貞松
伊勢 馬曹
上野 秀和
保吉
仝

梅は 大魯
斗入
恒九
羅城

貸青
虎國



向梅に半ばのすゝて乃るゝ
梅ゝやいつ氏ゝより奥山
ゝ乃ゝ梅の
蜜ゝ乃ゝ
垣の梅赤ゝ
去つゝ乃る雨も周ゝ梅の
梅ゝやつゝより奥の
去の中傾しや梅の左枝
紫垣や紫ゝ乃ゝ毒の花
沢ゝ去乃ゝ
去ゝ乃ゝ梅の

梅は 五趙
士飯

亦亜
祺道
祺六
莫二
希言
松兄
若義
仝

梅ゝに色ゝあるのなかもれ
なかもあるもの梅の
梅の花くもりもハ色きる立以
かもけ切ら素の梅の末ハ咲ぬ
まゝ風の立枝ハ梅のハ
梅ゝや寄るもちもれ古風歌
白梅やなのかりゝ人ハ来
よの枝も蕚に紅るる和
市中やひかりゝれて梅の
月の雪に十るゝ梅の
一るも拾るハちゝ蕚ハ

尾張 柳荘
青川
桂五
安芸 寺久
尾張 天老
双樹
紅六
春蹊
樗堂
仝
仝

仮の芝の伯みぬ和それも梅
梅ゝやうハの花ハ
まゝに田炉素るゝ梅の
人の家ハ楽ゝくれも梅
ゝもくゝ梅ハ田全
なかやうハ素ゝ蕚花
雪ハ紅ハ紅る和蕚
あゝけの梅ゝれる山
梅咲て破ハ紅時雨
梅の蕚ゝ花梅
梅ゝや本履ての

備中 菓居
菓兆
仝
成美
仝
仝
大左
布舟
尾張 五雄
越後 左琴
喜年

梅うゑあつるきれくの海の泡　下総　青岱
梅うゑはる笠見るゝ小猿哉　一礫
春屠蘇あつ乃るゝよ春の雪　武蔵女　花侯
金くゝて乃るをふし梅の花　可都里
河風のたゝゝはゝ吹こを梅の上　乙二
大波画梅のうゝゝ哉　仝
子を呼ゝ知てるをつして梅ゆゝ　仝
山河の穴をを蛙　ゝく梅　仝
梅のはな春こゝ　ゝ　道彦
はめゝゝ　ゝ　仝
うゝゝんゝ　ゝ　仝



山法の梅ハ人乃ゝ用乃ゝ
食ゝれてハ乃ゝ　一草
古てや梅のホ法の蟲の花　仝
まゝもゝや梅の芝のゝ　蕾三
古宝や梅てぬし　江戸　雷山人
袖ゝ　ゝ　伊勢　雪仙
大腸ゝ梅の　ゝ　法仙　乃居
ゝんゝの芋曲ゝ梅花　乃化
梅のかゝれ深山ホのゝ　素迪
蟲咲て花の山ゝ雪　岳輪
凡乃の春先　ゝ　仝
延　椹雲

梅の文ゐ井のあゝの写しに
家まもりてゝ去そ春ぞ
梅の本ある白もきれゐ
春ゝ人の出ぬりや又うち
うかゝやいつまて咲そ淀の梅　仝　一茶
まゝれハ鳥の音いそ梅の香　仝　素梨
かゝれ春を喰ハ梅の垣根　仝　长高
向梅ハ来て鳴る鶯ゝ　仝　魯隠
梅の風鏡ハ入ゝ見ゝ　尺又
はおふきて梅の数ふりゝ　仝
人の梅て向ゝ赤の魅や　大阜　平角

尾州　陸奥

義七も旭ハあゝ梅の香　近江　鯨別
ゝ入れつ業出梅の芝ゝ　薩ア　竜門司
春湖ゝ人も時ハも春の香　京　定雅
すむゝのんも月ゝは梅の香　尾張　魂義
古器ハ白ほゝ梅のひきゝ　陸奥　寒松
春を白ひするやハ教のゝ梅　同人
人息ハ旭ゝ入し春の香　亜淀
いゝゝりまを月きゝ軒の梅　玉屑
梅ゝや井もゝ崔の春以　蕉雨
あれもゝ学るも来ゝ春ハ　肥前　鞍風
笑すれハゝゝ向ゝ梅香　万和

春ふ深き本ハ河の水そ梅の匂
梅ゝハさやこ山河を出ハ〳〵
人の木ハ〳〵ちはゆめ〳〵梅の花

梅はゝやふ〳〵おもひ〳〵ほ〳〵ゆる萩
散りけや屋の色ハ〳〵ほ〳〵ゆる萩
片例ハ石切さや梅の花
いとゝ〳〵ひしもまゝハ〳〵ゝ梅花
紫の戸や梅のお枝を見れば
山の梅咲て小笹のちらし
そ〳〵〳〵風〳〵梅の蕊ふ
河風ふ吹ハ梅のてりゝ

京　申高
京　三法人
仝
信濃　汝蘭
京　奇閑
京　芦涯
京　篤老
和泉　喜高
和泉　扁如
仝
近江　于當



四ふ日の旅をもりふ梅花
見て春ハ〳〵ゝ梅花
山陰のゆ〳〵〳〵梅も咲ふ〳〵
梅ふふ〳〵ゝ〳〵梅花
常ふ〳〵ふ〳〵ゝ梅花
思〳〵ふ〳〵ゝ〳〵ゝ梅花
梅の花人〳〵ほ〳〵ゝ匂ふ〳〵し
梅〳〵の廣おゝ〳〵ゝ梅花
人ふり余計咲〳〵ゝ梅花
男重ハ〳〵ゝ梅のゆ〳〵し
〳〵ゝ梅を見ふ〳〵ゝ書の面

京　面池
梅阿
葵亭
摂津　吳老
三河　卓池
女　志宇
阿波　益堂
能州　其成
桐栖
備後女　きく
武蔵女　演藻

梅見して人おそれぬ山路かな
垂に来てちるやちる手豆かな
梅が香を通ふ影らぬ秋の風
志ろ梅のそこらまでほの咲けるかな
不断流して暇く咲よ梅咲
梅々のほそれかるや霞
梅の花筆にあまれる水なかり
こればかり咲くは梅も白ふよし
秋晴の冬ひらすわが梅匂ふ
梅遊むかうの二十五日かな
酒ゆする花の庵や梅見舞

江戸 護物
方円
信濃 金花
鸞岡
甲斐 漫々
古卯
越後 双烏
伊勢 孔阜
京 凡峯
山城 空阿
陸奥 貞南



梅が枝に大きな鳥の夕霞
夕梅やほうほうと去る雲の雪
白梅に匂うも山路の夜明かな
門の梅草鞋も匂ひかな
梅一輪二輪に日足なき寸
梅の花その身あふれる庭かな
小雀の梅も咲きかけもしくなる
白梅に人まんの夜明かな
水去を釣け八谷の梅匂し
耳六十鼻八百で梅の花
小豆見もやかがる軒の梅

丹後 巍道
安芸 素向
京 茂良
江戸 一蕙
甲斐 有斐
薩摩 琴別
越後 其静
陸奥 北達
出羽 花發
武蔵 菊塢
陸奥 律大

人の梅答てもし梅挽て
梅咲て梅ゝきんかい
梅ゝの中ふまるゝ人もゝ
梅ゝのかたち来るや井梅
らくれるすれ出むすし梅の花
ゆおれらしてゆらゆら梅花
梅ゝや風ふほる捕のあ
義の本ハ月ましてみるゝ梅花
時ハこれこゆ里ゆて雪の花
るれるのうハ梅そ梅花
梅さくや鬼のはる柳あて

近江　高頂
伊勢　如雪
尾張　野秀
近江　砂丈
信濃　何頼
尾張　了國
遠江　青梁
三河　岱兮
出雲　花叔
　　与人
阿波　鳴雄





ゆ春同の梅ふちゝ梅花
陸奥や梅ゆ梅ゆ梅ゆ梅ゆ
枝くハ雨ふゆ梅ゆ梅花
中梅や陸ゆ梅ゆ梅ゆ梅ゆ
数多の梅つゆ梅ゆ
を話ゆる手雨ふゆ梅花
ゆ月ハふゆ雨ふゆ梅花
梅の戸や数のふゆ梅ゆ
戸ゆゆけてゆゆ梅ゆ
梅ゝをちゝ梅ゆ梅ゆ
古枝ふ押ゆ梅ゆ梅ゆ

尾張　金谷
常陸　九似
尾張　李墓
信濃　一之
安芸　素玩
尾張　宇栒
尾張　菖井
安芸　南溟
播磨　一曉
備中　楪周
尾張　帶楪

## 月前梅

梅干は実なれば梅の咲ぬる
起郎は梅を[illegible]
月雪は同じ[illegible]梅の風
暁や梅よりもとの[illegible]
鶯は蟲[illegible]
人[illegible]

下総　普記
上総　里九
筑前　保玉
肥前　汝南
太節
青蘿
陶更
五明
重原
公

能[illegible]
梅の月素[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



撰[illegible]
梅[illegible]
[illegible]
蟲[illegible]
梅の月人の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

賀
下総　松井
肥前　士朔
長翠
祥禾
可新里
公
車大
一草
蒼机
斗入
公

夜梅

寒松　近江　千影
公
蕉雨　尾張　少汝
其雲　伊勢　無曲
梅價　京　武陵
未彦　浪花　推己

甲斐　幸元
秋峯
吳走
泳帰
下総　惟平
阿波　荊玉
下総　布雪
尾張　湖風
近江　春雄
安芸　両岐
暁雲

人言ふ花ある梅見ん
春ゆく綾ぬ見ゆるを素の梅
梅ゝを折ふ春の霞森
梅ゝかゝる春あり 旅の事
春天ハ樹ゝ多ク春の雲
霞周の松ハ多やし 梅雪
梅ゝの春ハ押かゝる戸に
雪過て梅ゝつゝ見ゆる
梅ゝや春はめゆく春の美
小地灯ゆくゝ梅の匂ひ
梅ゝ見ほゝて美人見ぬ春

陸奥 鉄船
阿波 青梅
尾張 白岡
信濃 桂五
陸奥 綺石
阿波 斗入
羅城
有篁
信濃 如毛
完素





折梅

梅ゝ見ぬ春ゆ春のあらん
春の梅ゝ見ぬ春ゆ春
かゝしかゝ梅匂ふ春の
まゝの春の梅ゝ見ぬ
雪ゝ梅ゝ 梅ゝ油鼠の一春
春ゆ春の梅ゝ見ぬ
梅ゝの春ゝ梅ゝ森ゆ
春ゝ見ぬ春ゝ梅ゝ
梅ゝ折て長ゝる瓣の春ゝ

京 菊二
江戸 仝
飛騨 素卵
陸奥 松蒼
信濃 蒼机
陸奥 乞志
信濃 其成
世竹
吐丈
太節
雪破

梅折よるのそれ先角のうち
梅を折言ひて夜深よりう
折出るる友にて梅を折出る
枝折戸よ傘立てて梅折ぬ
折やしあく山梅の枯れ
山のとに二人ひてある梅の
出咲て梅をうるぬるうれ
梅をるに新のんのそうれ
一本よ折や其角の梅の
梅折や月如客をうるを
山梅ハ折そうるれ物出

武蔵　春湖
長崎　五明
卧央　雪江
士魂　似竜
公　雪雄
蕉雨
少汝
文兆



浦梅

乙のよハ梅折うう梅の出
梅折ハうきちるとうの上
梅折や梅の絵きお役人
浦の梅出ひてふ咲ようう
うとや梅よむくてんうる
松ありて波もかうらあ海の梅
梅うの浪りもひるそ深深
海とハ山寒うもれ出山
山面ハうーよ井の梅出
梅人よ梅山梅咲ようう
ゆうくや来て丁梅山

陸奥　廉〻
瑞馬
大坂　蒼我
暁蓋
鉄船
貞松
恒九
作者　魯竹
柳居
鉄船
斗入

## 里梅

散れうんてゐるのはちるみぬ梅い
市梅の大々しおれるみ中い
野の梅や雲ふんのあるやうに　　羅城士訓
人の見るら梅ら朱らみ梅の梅　　兄直
野梅ら雨降て庵やそら　　蒼机
ちる蕾ぬうちよりちるのみ梅い　　尺文
人ふ京の梅ふ自ら手里の梅　　长高
ふ法や義多かる里の毒　　内雄
ふ里ハ梅の法るのあれいそ　　保谷
大抵ちうもきの里ふ梅の宗　　蒼机
馬見を家ふもかうそ里の梅　　几化
　　一茶



## 宿梅

宿の梅ふいとるるなよ折ふよ待　　河内　乗記
家宿の梅毒ふし梅の宗　　樗良
梅ら八梅ふるく梅ふちる い
毒ちるやるの踏ふ入聲る　　存亜
ちら降の梅ふ梅ふ雨い　　希言
雨の梅のちるふ人ふ折ふ　　陸奥　乙因
雨ちら聲ふ梅のちるい　　有篁
ぬやふ毒ちる毒の見い　　樗雲
折ふちる二月の梅ら朱ふ　　年心
ちるほふ法くふ梅のふ家い　　信濃　帝杖
ちりてはるふ梅ハ美ら色　　道彦

遅梅

紅梅

梅の花ちりて後きさの履い
ちる梅よりはの鼻のうへ
海の梅嶺のやうに咲て
名ゑよりもやはらかに
梅よりるかやとるれ咲てもむる　武蔵
梅ちるや四ををるるも十日余　信濃
梅ちれはれ白の胸よ抑かる
蕊焦るあるもりいて梅遅き
梅やてるゆるるの中二日
梅よりまるく撫よ笑れ
梅の義ふる物うんるの義

筲老
秋夫
碩布
鹿野
雲帯
傳物
梅岡
寒松
暁臺
柳居
蕊村



梅や雪の沈のうつのちれの
梅や宮うの頃ゆるる名れ
梅の時元めめ答い
梅に夜ものけ沼人雪
梅やもの子如は
梅の名よるのはもう
梅や匂ふ童のつれ
梅やもの出人の付て来る　蕊
梅の仏ゑ屋ちうう
梅や老木も名の裏一
梅やとうの時名の名ち

路白
戸
百鬼
冬柱
几董
保古
斗入
布舟
柳几
成美
几帳
道彦

## 松若葉

[illegible]

一茶　雄閑　篤老　饋物　挑村　鈞義　鬼平　京　蝶美　士鋼　大和　巴橋　素鄉

## 柳

風ひやゝかに流れ来る柳の糸
柳の糸柳の糸ハ長くなる
柳の糸柳の糸ハ指ゝ結ぶ
柳の糸ハつゝゝ匂ひ
雲よりもつゝゝ柳の糸
はるゝ出て出れば柳の糸
柳の糸布引瀧の糸
河砂や雀ゝ
すゝ足て星にはひき柳
嫁入の足てゝ門の柳
まゝ柳ふゝ跡のゝ入る

白雄　公　保吉　百雲　京　陸奥　奇閑　百非　安房　鳥周　下総　素岐　樗良　公　曉臺

人去て跡中の梅ばかり
まて梅や二筋三筋所老木ら
苔の曝ひはめて　まを春
大ものの沖きを　きる梅い
道の辺や梅ふかるまの角
秋湯ゆ　ふ　ゆの梅　光蝶
眺る庭　鶯　て　過る　の梅
梅ちるを　ちるそき　見ぬ　孫ち
雪　ほ　ほ　ぬ　梅　ち　ぬ
門　め　梅　う　ぬ　ち　ぬ
ゆ　ま　て　鶯　ち　ぬ　ち　ぬ

公　柳居
公　周更
公
蕉太
白雄
公
岱青
保古
几董



白雪の梅ふ　黄る梅い　漢ら
咲て　ら　の　る梅い　百咲
はる　や梅に通る　の
まて梅や　通る　の
梅見て　人　ら　義　ん　秋風
まて梅や　ふ　ま　の　多　宗漢
まて梅や　梅の　ま　の　破
ちけ　ら　の　る　家　俵　五鬼
久梅　まる　雨　宋　の梅い　左鬼
まて梅や　ま　ま　る　ら　白園
まの人　梅　ふ　ま　る　八童庵　越谷　青門
郎也

青柳ハ梅に名を取れてよそのなり　浪花 春西
夕月の影に辿よる柳かな　自楽
こもやれ植て覚もなき柳かな　似青
青柳の大和の國とや仕なや　大江丸
磯の柳白の長者さへ植らる　希言
こや見ゆる船出のよし柳陰　可楽
めきめきと春を動かす柳かな　恒丸
柳から春の雲みえ付て居る　錦六
市中の人に押るゝ柳かな　琪道
青柳ふるき苫の媛ハ春にかゝる　士朗
青柳の雨やふる家のほつれ口　仝



青柳や食をたべかけし小舟の走　京 樗雲
柳陰田を作るかたや柳の末　仝
一株の寄る曲る径かな　越前 馬印
松越て郷も越てゆく人の家　呉山
青柳に流を汲むほどの日和哉　長翠
人の柳ゆかしく見ゆる来て居る　仝
青柳は春の来ぬ先の柳かな　巣兆
旅人をなぐる吹出る柳かな　加賀 巣居
中々に雨にかかりぬ柳かな　眉山
家ありて又柳ありところどころ　成美
春の柳しだれて水に来たりけり　仝

春梅よ埃のうる天満宮　流水
春の凄うう見捨る東の梅哉　下臣
此の梅の折りて以ふ事哉　三顧
郷おるや梅過ぬ水ある梅　年心
あらおしの梅見るるや雪の中　可都里
春雨人の梅よかくしなん　公
ひや筋ふまいなのこれぬ梅哉　一草
春梅や四天尺ばる雪の中　力長
やれ今てあれさるねの梅哉　公
梅代へ古くあるまい辺哉　道彦
いをまきれのこある梅哉　公
公

七種の七勢過て梅つれ　乙二
いとおん寒て見捨き梅哉　公
ぶしくやや来ぬ言やを梅　蒼虬
海辺ふまはめ里の梅哉　公
姉よりは見るまき梅や海辺　百池
考富梅そまう来ぬ今　公
ゆ来ぬ梅ちとのこるもよる　岳軒
三る月ふふふ伸ぬ事哉　公
いつまて北梅ふ雨のこもと　塊義
春梅や画ふかしまる天満数　富三
むの見ぬ水ぬ来る梅哉　公

八九軒さかちを庵より梅の
梅植て蒲の色おんるれ
こゆくや猶き法やく梅の
青梅やてに宮方の枝おれ
灯より見る光寺梅の
青梅やそろく接ん
簑虫のきれさむ風の梅の
ん添れんそれる梅の
梅うう入れ小ぢく新の家
かうすしや接ん梅の宋の
ん姫ル青梅の法ん夫や梅の

少汝　江戸　京
越前　素檠　青蓋　五蓑
素柳　魯隠　菅笠　仝
青郷　董堂　奇渕　千鬚
仝　冥く　仝　伊豫
作志　蓑中　　姫別
　　　　　　　長寿

○世八

青梅ん梅の法ん蓑ケ中ゆくれ
破れれ小ぢく布青き梅の
吹ちれて青き旦れ梅の
ん青きく嘆るる青の
ゆの上や梅の下の館の色
皮剥ん姫ケ梅青ゆれ
青梅ん宋の南の枝ゆれ
世ゆよく青れ付る梅の
緑ゆくゆん梅ん加れ
梅ん夫ゆよれ夫ん
青梅や夫ちく加る滝屠

安芸　安義　京
甲斐　五鹿　一茶
　　　墨眠　月化
　　　　　蕉雨
　　　　　秋夫

海山ふきてうかくり梅弘
鶯の脛もゝ梅の妻毎に
まき梅や脛まのぬけ頭代家
まき梅のうしろ久よくて張れ
門梅変見るやうにのうしろと
面うつるよの笠りの梅弘
かき新や梅弘市の中
まき梅やあわすりて舞の舎す
傘片てゝ梅弘のめ成す
湖畔の光る梅の間弘
まき梅のうきを言へる梅弘

葵亭　出羽
後物　野松
三浦人　上野
壺半　陸奥
春魯
阜池
嵐弘
春高
梅間
瑞馬



人別ぬるゝ山や田中に立梅
まき梅の美をむすびの弘名
沼ふまれゆゝ似る梅弘
まき梅やあんや松の雲
まき梅の片る雀の川まち
まき梅の気ハふれ片くわ
戸を吉〳〵敵ある梅の梅弘
梅まてまゝのやいて蛍ふくわ
角墨ふておる梅弘
ちる使うきあの湯る梅弘
まの片ハ唐めく海の梅弘

漫〻　女　志宇　作家　井眉
高頂　俳諧　阿市
鶴鳴　安嘉　可友　筑波　其成
湖中　京　其成
古卯

青柳ふるまつ清る戸に弘　上総　青梁
柳よりおくれ八あるるおくやさ弘　鞠之
柳よりおくれまつれきへ水ふる弘　用法　古梁
大鄰を押ふれ入る柳弘　陳奏　其映
青柳のうくいるる黄夜片　布席
笹をすする柳の屋ゆく弘　素迫
親はをゆうふ廣る柳弘　素弧
青柳の糸能ふ糸四て　推己
糸おるや糸のあるりを柳　江戸　秋兎
青柳ふるる秋吟糸を掬ゆ　百狐
くい柳ふれきおるてい弘る　陳奏　俳佛

ふる郭ふ法めて着る柳弘　常陸　桃村
日の着るまつ法ふる柳弘　加賀　紙三
月ふる法ふまて柳ふつ法し　五葉
月柳坊ふおくまの金ふ　菊塢
門の柳移ふ柳ふ　安房　竹枝
和ん柳のつけて柳ふ　成　李尺
菴ほの青ふ柳弘　武蔵　柳江
よふ人を連立ふ柳弘　下総　野遊
大風ふ吹ふる峡の柳ふ　隆水
柳ふ雨ふ柳さ弘　姜村
柳さふ乳ふ雨の乳　暁葉

# 椿

拾八首 甲斐文 柳

一草 椿

一茶 椿

三津人 椿

絶句

双鳥 椿

白雉 椿

柳居 椿

寸乗 椿

五明 椿

乙因 椿

祐昌 椿

有筆 椿



摶雲 椿

丈左 椿

完来 椿

千尋 椿

乙二 椿

玉屑 椿

一草 椿

道彦 椿

蔔三 椿

雪燈 椿

寄渕 椿

[illegible]

其堂　下総　雨塘
護物
自来
陸奥　雨舫
梅岡
越後　石浦
陸奥　柯亭
玄蛙
京　守三
常陸　左文

鶯

鶯の鳴やちいさきいけの
低き木に鶯なくや屋下り
鶯やそのゝ孫れに名鳴る寸
鶯の鳴てかゝる仲なれ
黄なるや人やわ西風の野
鶯の古郭ゝゝ初音哉
鶯やよきほまつの野の雪
黄なるの清へ水そ初音哉
初音てゝ鶯下りぬ臼井本
鶯の起かはなるゝ山路哉
花咲て鶯のおもてきゝ哉

茨村
仝
暁蕙
仝
仝
樗良
仝
几董
仝
蕪文
白格

鶯のこゑ聞ふるこゝろ初音哉　仝
笑ふのあゝ義仁哉　淡く
ひとけなき梅ゝ鶯の老音哉　虎國
はなん鶯の老あるあふ　岱青
鶯の春おもおもの中ゝ哉　仝
鶯や嵐吹ても鳴るす　保喜
笑ふを沈丸ふ小樽哉　仝
鶯の巻ものあるもの中ゝ哉　仝
鶯ゝ梅ゝ沈ゝ藤小　野梅
鶯の鳴つゝあゝ初音哉　舊鳴
淋笑や義鶯の鳴ゝ人寺　宗徹

鶯やはなれふるあの柳の葉　重厚
鶯や梅ゝふゝ指鳴てゝり　大江丸
笑ふのあゝ伝ひ鳴ゝ哉　白圃
鶯の初音かそゝ笑の上　仝
笑ふ沈あの流ゝ鳴る女乳　五鬼
鶯や中ゝよゝ小あゝ哉　斗入
笑ふを琴ゝ拾ゝ書本哉　仝
鶯の洲ゝ中セッ下ゝり哉　綺石
笑ふゝ中ゝ春ゝん小ゝ哉　羅城
鶯や糸ゝ引のそゝ前の女　熊の　甫尺
鶯のかすゝ中ゝ雨の枝　樵左

雪の首を引ぬるや古笠　希言
雪ゝけさ踏分る菜畑哉　仝
黄色なるの咲ゝて雑木哉　仝
雪のおろんいくや野畑　晩丸
雪のむそうにてるふる哉　帆瓜
黄色や老の枕も白み時　柳荘
雪より玄関の戸ハ開ぬ　桂良
雪の中吟ふるゝも哉　祐昌
黄色の主言に成る名哉　似鶴
雪のうちゝ向ふれ九い良　存亜
咲初て雪ちるわるよれし　播广
蝸國

ほうゝ時雪　葦の枯　士朝
雪に春のかゝるゝ　仝
ゆりおろ兵雪のてゝ哉　仝
三界ゝ雪おゝ立ちゝ　琪六
雪や鶏の古附を踏ぬく　摶雲
雪ゝ晩ゝ立ちゝ菴哉　仝
黄色や摺深山の枯ゝ　仝
雪や蕭条て二日ゝ　仝
雪や鶏ゝ鳴むゝ寺ゝ家　仝
雪の人をうつ角ゝ　仝
雪やゝ浪見ゝ悦　仝

阿波
葦洲　菜居
菜非

鶯や筆見まもる市わらは　仝
去ハしの鶯ひとつ二日有　陸奥 守居
鶯や傍ある石を投ん　青楊
鶯の声やや力ある入りして　素議
春ねとふ人に鶯啼しけり　京 鳥和
鶯のまつ啼声を見送る姥　成美
鶯の腰にかきゆる縁居　仝
鶯や枝一坪の垣講　完来
鶯の声もけふ名丸き木百に　丘言
鶯の声てぬ木もおき左ぷに　祥禾
鶯と春との中のすれに　可都里





鶯の恋ふみ入る初音に　仝
鶯みだらんかをたれまりつ見　下野 端烟
黄鳥や汝は野かち目出たちら　素麿
鶯ふたつ位付く藪本に　一草
鶯の第代こめし初音に　仝
鶯の初歌ら法る帳帷に　乙二
鶯や田つくより来て見る鶯　仝
友古きて鶯まるん冬ん　仝
鶯鳴の鶯間て居る名ふ　道彦
鶯の波にありし小藪に　仝
鶯やるの暮頃も飛み声　月居

雪ふるとてうぐひす鳴ぬ　蔦三
雪ふる梢をうぐひす　仝
雪ふるときうて笠の庵　瓜坊
雪の古女房もあり　素卵
雪の寄籬ふぬる小雨　尺艾
雪の東向ちりおすれ　仝
雪のちるはさして世の物言　蒼虬
雪やぬれ狐ほつるの井のあ　振別
雪やいもうと猫ばちる木　宣雅
雪とそのりくのあそれ　桃月
雪やうるおみ出ぬ　仝

東

雪の果報やとんなあんみてる　寒松
雪をまくまつ白髪ふる　月化
雪ふるまつりて深ぬ井柄杓　雪笠
雪の菊八ぬるまつりて　冥〻
雪を周ふるばる　仝
雪ふんあつ丹一日　丗汝
雪ふるのうきとの浦　魯隠
黄ちるの寂て静おそ　長角
雪の月　仝
雪のりふする乾茶の煙　桂雲
雪ちるの月ふ入て　寺閑

雪燈　雪の降りて来る夜の雨
篤老　雪を切律義もれ
蕉雨　蕉葉を周囲にあげて
梅岡　蕉葉や敲き入れる尾をあげて
三浦人　蕉葉の葉末なる蕉の
肥前　蕉葉の葉末なる蕉の
菊也　蕉葉の葉末なる蕉の
卓池　蕉葉の葉末なる蕉の
漫々　蕉葉や蕉の一枝
美紀　蕉葉のよい場所にむやみの中
蟹丸　蕉葉の葉末なる蕉の
美波　蕉葉の葉末なる蕉の



蕉葉の葉末なる蕉の
蕉葉の葉末なる蕉の
蕉葉の葉末なる蕉の
蕉葉の葉末なる蕉の
蕉葉の葉末なる蕉の
蕉葉の葉末なる蕉の
蕉葉の葉末なる蕉の
蕉葉の葉末なる蕉の
蕉葉の葉末なる蕉の
蕉葉の葉末なる蕉の
蕉葉の葉末なる蕉の
蕉葉の葉末なる蕉の

秋夫　秋の夕暮れ
井月　秋の夕暮れ
秋峯　秋の夕暮れ
加賀　秋の夕暮れ
廉丸　秋の夕暮れ
蕉雨　秋の夕暮れ
藏丸　秋の夕暮れ
雪丸　秋の夕暮れ
調茗　秋の夕暮れ
江戸女　秋の夕暮れ
伊代　秋の夕暮れ
〃　秋の夕暮れ
地夫　秋の夕暮れ
静子　秋の夕暮れ
石海　秋の夕暮れ

竹里より芝を買るの詩をよみそめ
買るのたらついてみるふるい
買るふるゆかのこゝろ風をすて
買るや梅の蕾を点ずして
買るの庵る時分そ汁かけん
買るや芝買るの人の義をつゝ
買るやゝへハ吏書そ孤し 侍
買るや涙の曜ゆるみくし
買るみ吉ふてちるて毛用と
買るの月出度ゝ〳〵名書し
買るや梅ゆ出るゆるゆる根敷垣

座奚 寂〻 冥也 文飛
出羽 几峯 座奚 北鳳 浪宗 梅後 推己
浪宗 輪之 浪宗 書哉 江戸 夯貨 座奚 文師

買るのどこへもゆゝ義の雨 江戸 ゝ元
買るの胸毛ゆゝ根の裏 丟雄 尾張 大扇
買るふ二るあるゆゝハるハ永し 下総 魚文
おゝゆ芝ハ買るふゝ上夏ゝる
買るゝゝはゝれぬ分ゆゝるゝ 常陸 梯唐
巷るの物言ゆ入るハ逢ゝ門 詠帛
買るゆゝ松ゝれゝ江を咲く 百非
買るふ松見ゝる松み引言ゝ
買るのうゝゝむゝる風ゝ
買るふすゝられゝる芝屋ゝ 浪宗女 笹町 筑前 可丹
買るゆるのゝ人ゝ日すゝ 上総 月松 備中 曲江

雪の猫ちまきてゐる朔日瓶　江戸　守静
美濃の却なきの枕　越後　井里
ゆうすいし雪ちらゝゝ義つき　肥前　文閑
雪ル松ハ枝へは嫁のもみ　太節
枝ハ小ル尤ハ減こそ百ふる　樗雲
曙の蕗こそちくて百ふる　紳六
わるいはひつゝ百ふる　祥禾
白魚やうきの周ハ周を周　蛟墓
白魚ハ骨ハ周を用ふ耕ハ　仝
白魚やそれゝゝる火の清ル　蓼太
魚ハ白魚ちひゝ菜　白梗

白魚ハ微月黄のうるみハ　大江九
白魚や老て繋らんもれ毛　五明
老ら魚ハ雪ゝ消ておきま　指江　東雲
白魚のあゝよ見て松のうけ　士誠
白魚の甘ゝ泥ぬ丸て毛周し　成美
白魚ハ鰊のゝ人ハ人ハあり　江戸　竹文
老ら人ハの魂ハゝる内俊ハ　道秀
白魚や止る為ハ大ふ用す　菖三
ハいたゝやもゝふゝれおる乳　瓦金
白魚やゝれ尾阪ハ毒を白　井看
老ら魚ハ仏やらふハ仏ゝ　晋頂

## 蜆

[illegible]
白魚よりもなほ橘の匂ひ弘
白魚をもよりもなほ有難弘
白魚の淡雪流しなる酒の上　上総　呼牛
白魚よ孤舟　歌の義と笠　九似
ちあや蜆こぼるるもあれ言　白雄
深みどりの青ら蜆蜆かな　土佐　本朱
樣の木ぬぎ蜆汁　道彦
冥ともてうぶ蜆弘　五芳
うぶ[illegible]き石交じめ蜆貝　京　其成
笑顔ふてぬ[illegible]蜆ふ　安房　扶也



## 蛤

蛤のおもりとなるもあるもの弘
蛤のいとふもまのるうけ弘　丹波　吉川
蛤ものいかくるんれ　昌平
ちるうちに数あるもの元　白雄
獺の祭よ出よ深夏弘　肥前　蓼亭
仏の魚をあるそ獺のつけ弘　護物
義入の二人よ来て来るかな　文兒
やふ入の義やふ魚の考るうち　周更
義入れ見ふ[illegible]や親の魚　蓼村
義入を獺よのいとふ見物かな　几董
やふ入や獺の空の雨ふ魚　晩臺
白雄

## 獺祭魚

## 春又入

源氏画の中より出る義入い
書又入やもしくの浜松の七以
義入やかたき策をあつて
やふ入や麻こりよりも策一り
義入の風おりうるくメられ
やふ入れ寵とかおみて二有い
義入の月ちと義やるの有
やふ入の根こおいて立つ五の芸
やふ入や鶴のこうふ立つ五
義入の雲こてもれいおるい
やふ入を磨き植ふ来くうの

雪酔　左咽　士頌　書壜　尺文　寿例　一茶　桐栖　以号　三流人　之綱



海　雲

海　苔

籠　笠

海苔とて春九ふ籠笠うて
わりすりや海苔ふ壜ふうを見
海苔とりやすふ波ふ立つ
為義吹きのれて破の海苔
海苔業九風ふ吹ふ破ふ頌
海苔業や遠波のもて雪の宗
まち海苔や波の底まてまの文
ふ文の文ふそふふのふ業
海苔業ふ別書ふれたる海苔
外を画く負つおもし海苔

二柳　光石　東九　乙二　業波　雪焼　一斡　まよ　大江九　屋馬

若和布　和布をかるや氣くらべとて見てゐれば　溪路

余寒　荒海の底もまゝなる冬の雷　菓兆

閑戸の大鉢たゝきや寒き　花樓

夕戸の夕寒きやたのみそばい　苺村

夕寒しるも出てあるかゝる時　樗雲

吟たて辨る此なくする寒さ　菓兆

演劇や屋の夕寒を行多路　篤老

引次の寒さゆるる寒さ　寄閑

新くやの夕寒きはるる外の寒　杜夏

寒もの夕ぬまして行夕寒さ　推己

寒寒し寒女のうたれ囊来　谷雄　陸奥

晩蕙



春寒

寒寒し二月淋りしむる海

的るうたひ人くるまい此寒さ　几董

うちやり此寒の寒さや裸の姫　外六

寒かるゝ松のくらるゝまい寒し　樗雲

寒松り物なれたる寒さ　素仰

よきぬを跳めるして寒寒　道彦

寒義すけられて寒寒さ　瑞る

寒寒し外ふ嘲るるそし伊　三汀人

寒角して待るるまの寒さ　周防　天民

寒寒し月すまるる枕元　下総　丘盛

梅干や寒の寒やまい寒　重行

寒の尺

霞

海辺

菜の花や櫓の木末にかゝる
雲の帯の遠く海なる黄昏哉　江戸　岸居
篠の葉の末にかゝる海辺哉　肥前　天外
海辺なる流うち除の小松哉　寄洲
鶏鳴のいつくやら霞　申雨
雨風の一夜すゝて霞哉　柳居
江の面てうつや霞の右りつこ　百明
めとまの長閑なる霞哉　保右
滝接てたゝれもひも霞　加賀女　寸元
深仮の振舞ゆかしき霞哉　春鴻
刈さゝの秋なる霞む林哉　仝
　　春亜



おなじ所を霞つる哉　恒丸
まの家の見たかくゝよゆく霞哉　士朗
その日の雨とゆ見えて霞つる　長翠
雪のあの孤くゝ霞むこの浦哉　帆原
茶の松雨うたゝなりて霞哉　書懐
霞む西にて雨の小雨哉　樗雲
霞まてのいとをよする霞哉　可都里
霞むこゆゆ人ハ待来て　成美
霞むれいまるもいるの浦の旭　仝
れ奏て長さめたゝの八重霞　乙二
霞むこゆ死こりてこゝハ春　仝

小池なる汀をなして霧はそ
咎りうける大木ゆゑや霧むら
咲きたれと五月のほれハ春霧
うち桃の流来るかよまとりて
霧むけしきあまの霧て見えそ
君ゆふ代たちそ人ある霧
世中にうち出て見るも色霧
霧むと色さし出て本の百
ほろくと源の笹ちる霧
何をかちりと松ゝあれハ霧
山風の焼ゆ霧むあれ霧

道彦　播广
仝　野泉
長高　幽晴
一茶
有房
素郷
玉屑
蕉笠
渡物





霧つむ路のにれ乾ぬの孔
鳴るゆ引て海よゝ亦の霧
山そゆ出つれてひらめく霧
ゆゝとひ出らめふる霧
不断来る人も霧むや相乃
りれてもて霧のゆ出ゆ
世代て霧ハ光に残りゆと
為ゝ人霧ひつゝ来に
枕ゆ霧の中ゆゝ
りれつゝ山ゆ海ゆ霧ゆ
走りゆて霧たるよ 雪

三津人　双湖　夢
梅岡　桐梅
漫ゝ
戸　嘯牛
筑前　呉東
源太　己鳴
筑前　柳左
田斐　湖中
芝九

朝霞

麦飯て鯉もつるゝ江の朝霞　梅岡

鳴る宿もたゝ夜中家むへし　由之

霞むや衣着きぬる鶯の声　但馬 来友

枯芥ハ霞をさらうくしおらん　播磨

ひとつあみ代旋掃こむ霞のあり　肥後 一壺

宿の灯まあかれて出れハ朝霞　下総 有丘

あとしきるに霞みるや芦ハ　こかね女 友る

端有ふ日のすつかつ朝霞　擇良

巨燵出てまゝ旦のさめぬ霞かな　几菴

ふにすむ小鳥りかたの朝霞　琪道

古きみなかみ庵ならぬ朝霞　士朗

夕霞

古ハ何の浦やら朝霞　可都里

有雪のほつれ霞の朝妝　道彦

それかしひとかれ酒の朝霞　月居

縁ふきむすふや志摩朝霞　葛三

暁の海凪ほ居して霞みゆ　大和 濮水

峰嵐の草やそらの朝霞　筑前 乙蘭

たゆかる亦実に霞みる霞哉　備後 虎道

山寺の樹ゑむ秋朝見にて　陸奥 文沖

子霞こふれちゝ夕朝くれ　菱村

八重霞は落ていまさ来るに　暁臺

定霞む夕や夜ハせかふくれと　保吉

夕霧れば女のつまぬ　山
屋帽子を忘て行るれば夕霧
和ぐらしはやうれ夕霧
夕霧あり　なの雨をかさ〻ら
夕霧ほうこうひらみて春ぞ
ゆく　毎朝ぬるるや夕霧
霧ぬや夕山みれ旅の笛
釣けるる魚ぬしや夕霧
山寺の霧ぬはるくるれ
い合の樵と春る霧れ
見帰や来しぬ見る夕霧

大江丸
斗入
帝言
丘る

出雲
尾張女
沾徳
雨柳

一茶
蕾三
扶也
一草
秋兒



夕霧はらはらまつのこずえの
ちられ葉ぬや霧の夕山
山霧地霧　杜霧　霧笹
山里ぬれし霧む遺れ
夏山ぬ雨の降り霧れ
なのはく降るるる山霧
よりぬ降ちて来しやぬの霧
霧ぬるるるるるる哩の霧
われ松ぬとりの霧ぬや霧霧
一本れ杜ぬ山の霧れ
哩ぬ出て霧むひとと霧て夕

霧

霧

摂州
布摩
吉橋
護物

長崎
草阜
月芳
中雄

播ノ
民蔵

尼
素月

女
志宇

摂津
春人

海霧

春の霧いとくの枝ちかう海上漂ふ國を抱て霧々沖上帆の捲くやうに多霧

海浪の色かすめて八幡宮帆を揚る鏑鞆の言や鞆霧

霧むまてゝみるゝ山々まの孤落霧旭を見はる海士一人

かゝくの漁軍上霧ぬる鎌倉

漁の舟田一枚完霧うゝ

破漁の沉めるおもむくや

漁の舟あまかすみ結ぬ

尾張　弱月　白雨

かが　浚川　丹波　尺布

出羽　湛水　松江　白雨

伊賀　一茶　梧雨　蒼虫



春風

ちらの片神脱て春の風

春風や肩ふのるあれふの敷

春風の春の霧にてみる風々

春風ふいつまて春の拍子ふ

面双まて踏ゝく店やまの風

春風のそそつをたゝ炭俵

春風やつれるるあるまの

春風ふ吹る物の照風

春風のこゝ流石ふ杖巳

春風や孤切ちゝ枝下僧

春の風踏ゝふ河原風

かが　周更　公　晩菊　燈美　几董　公　白雄　公　白鳥　保言　佛仏

壬生面や鼻の穴ふくまの風
九文毋を被るもかくをまの風
まの風や裸蓑る出る男とも
岩松い人ふいくとまれ風
赤松のあらいなるすわまの風
まの風や面大名のいそらら
まの風にふこうむるの寺ん
よる波ふ面ちけそやまの風
松籟や一夜ゆれいまれ風
吳ーきるを撰出してまの風
ゆるも幻人面ふめんまの風

傳奚

深春　春鶯　五鳴　斗入　仝　重原　天老　青川　狐丸　琪六　士鈴



まの風や狗ふあてる松笠
まの風や面詠の古搭ふ越る
木の針の寒ゆをくやまの風
まの風や面野のふるふ面姓
松風の下をふくまの風

下絵

まの風の月ふくまの上
まの風や水ふ髮の角ふ元
秋風も寒風ふきき菴ふ
まの風松床踏てこひふ
三日月をやくれめるやまの風
吹ためて風ふ墨ふらまん

傳奚

仝　布舟　丈左　吳山　胃尺　长翠　一碧　摶雲　五雄　南山　乙二

春風の白雪てしへもるる風
春風にすゝ[illegible]やゝ京たの
よきゝ人のゝまの中[illegible]春の風
春風や唐土のうつるも用ゝ
桐の実に春てもゆる人春の風
登高のんかくし春の風
春風の波路を渡る力船
微人ゝはいて来るゝ春の風
春風に元ひつゝわれゝ春
春の風市のおゝを吹まゝ
春に風ゝ[illegible]松ふも焚ゝ

一ゝ 道考
公 蕾三
玉屋
百池
伊豆 隼老
一瓢
雪笠
寒松
奇閑



本の白ゝ[illegible]るし春の風
[illegible]たの寝ゝや春の風
春風や今巻て立し 嫩衣
洞ひて[illegible]春の風
[illegible]春の風
春風の外に新[illegible]雀の風
[illegible]春に獨引たて春の風
[illegible]春の風
[illegible]春風
春風に[illegible]春の風
春風に海[illegible]の波のよ[illegible]

[illegible] 陸奥
[illegible]閑 魯墨
葵亭 徐英
千影 文卿
上毛 雲芳
小尾
武蔵 梅夫
[illegible] 九[illegible]

春風の春のうつるとあれば
春風やんみ拾ふものの上　尾張　大巣
春風の拾ふものてあるかて春の春　對る　琴松
破ひて春しあ春ひとるれまの風　常達　宗兆
るこへもふれ春の風　江戸　乗葉
春風やへたらくと海士の業　陸奥　自哉
ひ朝の尾ふまてめわ春の風　秋田　武雨
海あらハ薄ふ松んまの風　太節
残雪や柔ちるかの様ふ　不自
消残る雪ふるも拾ふ子供弘　士鯛
春の自れいるの春や残雪　越前　虚雨

## 残雪

春雪てまるる雪ふ弘　越後　鶯洲
春残りしやいすのうれる残雪　一茶
安振ふ山ふ弘て雪もしをる　寒松
冷雪やるるふ雪ふ北家　下総　孔雀
拾山の光ふるしのるる雪　信濃
春の雪屋てふ家弘　可遠
紙簾の自えて消るまの雪　晩雲
海江見んまの山雪北ふ清し　周更
春北雪解拾ふ井のあふ　白雄
春の雪ふ家野ふて住舞ふ　春鴻
雪光るまの田中や鍬ほり　五心

[illegible]

雪の雪雪のようなるものをたゝむ　斗八

雪の雪雪ハ塵とちりぬべし　森亜

雪の雪雪ハ[illegible]　松井

雪は雪なるのようなるぬれ　恒丸

[illegible]人の雪ハふれとも雪の[illegible]　士[illegible]

雪の雪女の袖に降　公

雪の雪ハ[illegible]　長翠

[illegible]ハ[illegible]魚[illegible]雪　摶雲

雪の雪ハ[illegible]　公

雪の雪雪の[illegible]見[illegible]　梅後

下弦　申[illegible]



[illegible]雪ハ[illegible]ちる雪の下をまゝのひろい[illegible]

[illegible]ろ[illegible]まのたるむや雪一[illegible]

雪の雪屋[illegible]雪[illegible]

寺入の小解　挑一　雪の雪

雪言の[illegible]

雪雪ハ[illegible]

[illegible]雪ハ[illegible]

雪雪ハ[illegible]

雪[illegible]

雪[illegible]

[illegible]

一[illegible]　双[illegible]　[illegible]丈　[illegible]義[illegible]　文[illegible]　一草　[illegible]老　[illegible]　[illegible]基

[illegible]

雪[illegible]

雪[illegible]

[illegible]

雪汁

雪解て山静し　夕雪
雪解や割木のよふに粗末
路の菜のやとりみへて雪解
雪解水ながれてゐるや鶴の巣
雪清てまゝ松よりあらはるゝ
雪解や辺土にあるり妹の方
雪解や井戸さき花の十五夜
山の雪いつ風ふれて新なる
松のおゝ袋ひとしたの雪解川
山雀の啼て来て雪解水
石原や篠の雪汁ゆはしる

武蔵　武蔵
袋　松蔭
守静
保吉





春霞
春霞
凍解

人恋しまの霞の桐火桶
小春あるれば春霞
雪もれば氷流る堀川
氷とけ雪ふれば春とし
鶯宿梅のうめのもゝ
ふゝめるむかやはひのみのなる
あるゝの風見る春の日の暮れ
暖の風志めりてなるや義の中
雪見ても仏出て出ぬ
出ぬまゝや岩の路の咲るせば
出ぬまゝ一日ゐるゝ城北

武蔵　寄閑
蕉子　蕉
閑更
雨塘
一茶
素堂
道陳
釣義
美業
斗入
素心

長閑

佐保姫

さくらさの咲しも立めるみを山ぶ　一草

山の名もさくら作くしと撰枕　道彦

留きすくひおれゝの発さくら哉　春哉

着の日てふみはしくさくらし　素坡

のさしや振入れあるうろ山　一蕙

のやゝ佐ほわけそ淋しや海の山　江戸 芳洲

其のやも施まぎれてさくらし　百非

佐保姫ハ何か揺きまさってれ　成美

佐保姫や見れば意ほける蓮の城　一瓏

さほ姫の技吹くれるに籬れ　菜兆

佐保姫や寄らぬの帝をも鳴子歟　尾張 素峰



山咲

佐保姫に坂のあるおてうかゝり　立燕

箟篛比志みそこ於ふて山まえ　下野 竹丈

俳諧發句題叢春中

二月

椿丘太節輯

元日の酔倒の来る二月哉　几董

大摘抱て二月の指尺る俺　五明

ちてハ居の水きき二月哉　白圓

あり〳〵あるゆゑ木の〳〵死二月哉　清鳥

二月やうぶ〳〵しき人の恋　青岐

二月の雨を二月のあゝ哉　琪乃

梅見て分を拾ふ哉二月哉　琪六

鴨減てゐる氏ひしき二月哉　可新堂

二月なるもちなる人まゝ来ぬ梅哉　樗堂

## 夜更け

垣根なる竹に二月の地紙
宵の雨はらはらとする梅の二月紙　月心
咲のみて半も散る二月紙　羊角
雪のふ思わすもこの二月紙　養亭
用ひなる清ふみ貴も二月紙　魯隠
炭の匂ひの家ふ生き二月紙　甲斐一作
燥ちるやはれ月みれ墓紙　白雄
二月にとりつく思ひ出す　白雄
ぬれ月や入日の底にすくふ　書蕉
ぬれ月や寒月の古井　士湖
夜更ぬやの内義の為もの小酒盛　月化
　　道彦



## 二日灸

ぬれ月や釣瓶ふあるる井のお納　仝
あたらまや遠ふむ思の酒蔵　雄閑
思ひのまたまたまし丁のお　陸奥
ぬれ月や光の出られる雲とも　答菴
射手の坊ふ月おし光れ　尾張
ぬれ月ふこるる梅の節白ふ　仝
夜更ぬや蒲の三ての書奥き　濃州
きさらまや歩のひもるはし　月彦
二月灸花ふる命大事と　飛州
葬の学ふなのそ二月灸　路考
ちのくに撫も咲て二月灸　耳
　　一黄　　三顔

鬼押塔

初午

ふるや弘法されたる鬼前　　柳元

初午や人はなりて板の月　　鏡子

初午やその指麦はのあるる　　向水

初午や切れ渡治屋も歌治　　茗村

初午や金ひさしぶりなげ麦　　柳居

初午や七つのまのこりて　　蓑太

初午や鞍のあるかぶ地渡治　　白雄

初午やふみけめれ山屋麦　　保衣

初午や負れたるまも屋ふけ　　左内

初午や負人きれよる乳母の高　　武秀

初午や屋まるもれ神ふろ　　馬十

一華　　搏雲



事納

蓑能

元月雲僧法

涅槃会

初午あるの山　　来

初午れ小義とられて咲く　　茶成

仮紙もいひよくれるや事納　　萬籟

る初屋そもしたてうう納　　道青

信根の良はるもける塊の風　　讃鬼

根能や蓑あるもを咲けける　　塊美

ちやりれ戸性にて山の有　　鬼車

ちやや雑もおのるの涅槃像　　方水

涅槃会や蓑仮紙を咲く物　　搏白

涅槃会や蓑仮紙を咲く物　　まき蓑

而向い美月るる良や涅槃像　　雪碎

知来のつるもれの　　向竹

ひるの屋根はいまる涅槃哉　信隆

孔雀も人に似て枯れ仏哉

涅槃のる法しき雪の降るか

涅槃会や昼一過て相次捕　保吉

法まれ不思議涅槃像　斗入

涅槃像眼鏡を置る洞哉　春鴻

これほどに分る涅槃哉　重厚

登人の近てゆる涅槃像　五吟

新宮にゆく人と涅槃哉　士朔

見る会に出ぬ涅槃像　仝

角ゝ人を寄る涅槃像　仝

可勝亜　紫昌



涅槃会や手の爪物る小門哉　江戸　機関

ねむ会やたゝ一殿のまゝし哉　袁丁

ところゝの名は今より涅槃像　尺文

涅槃はる魚の眼の赤きかな　素卿

海のうは松笠浮ぶ涅槃哉　桂堂

食色の沖ゝく涅槃哉　護物

涅槃会や今来るゝ涅槃哉　双舟

鳴ぶ乳鳴手の涅槃のる　漫く

雨りふる手の爪のるを涅槃　鳥酔

足ゝの世に生れて世やむの涅　向楼

雨りふる句海苔も咲て今り　沐上

京

嵯峨松の井にゆふなつり　一
松の木の雪の井にゆふなつり　一
みつつ浦塔ぬるれぬ浦波　一
貝よりも菊しぼりの櫛　貝　治郎
貝寄の風　八橋の通ひなり　車庸
橋塔や柳の夜に風ふる　恒丸
ひん迫ふる手に入る　芦涯
吹つれて柳に海も彼岸の雲　雪嶺
山辺ふく桜の笠を掩ひ　向樓
傘をぬにひらく彼岸　仝
山里によい清のふる彼岸　菖三
られとふるもおのれひん　蒼机
　　　

人の幸さらけや秋月
秋月海吐く入江かの寺　筑紫　森亜
秋月そするあり松の月　士朗
紫雲寺の寺より秋月　上毛　風狂
月秋不詠き時習ふ言ふ　長翠
なのらしき文とはなく秋月　京　南曉
雪ふりてこれぬ秋月　葦洞
ふたらぬたり国より秋月　素盞
横幅ハ松はより秋月　江戸　柳府
鼠戸ものひそけるあ秋月　道彦
物のつひ月ふれて秋と　冥々

○六十九

ふりうの秋や月ふけつまり　月居
向海の鶴ふく寺や秋月　寄別
智の海ふりしろを秋月　武陵
江戸の忘保すや秋つき　秋夫
秋月大すれ人のふり　武義　南山
戸の月やの大の空て秋月　尾張　東陽
秋月ふ江に奥あるこの形り　伊勢　石鼎
元ふ鳴るこにの秋月　伊勢　素律
合歓の本ふ忘ハ咲めの秋月　上総　馬逸
井ふ秋の秋ふそて秋月　浪速　由之
秋月ふて尾上の松古き　秀元

梅花

雲の紙義忠有おといまする
紙表とるりめ檀の木梅の木
紙表や清るんきるる細子の
紙表や向こうえせるるの汗
紙表やんのてかもたる
井の井紙も紙とあり風
大内紙打ちえ紙紙風
紙表や答る時て雨とある
紙表やそのうるるの書
うるまるり梅のとしまの月
けらに月ほまるとまる白ひ

向之　桑亭
賞月　兼波
笹菴　雲芳
守三　岩吳石
桃子　丹波
晩墓　仝

春月

雲の月ほさんるる景くり
柳ゐる鮮の源をもとりまる月
松元井のたのまて雲の月表
それハてこれい新よるまる月
木にとまるまの月らるる雲月
下ていれるうくとまれ月
雲ん〜めるる松の月表
河一木手つても康のまの月
雲の月鏡るれ雲言ハ傾め
表の月松にこれ世ハ表
教すれと見るまくん雲の月

二柳　宗漠
春鴻　斗入
五明　亦亜
昭九　塢国
士訥　仝
仝

春の月むしろにつゝみて春とし
まつのうれたゝて出でり月春哉　摂津　公
雨うるおのこゝろとりてそゝぐこれまた　公
海松ふる浦のこゝろとりてそゝぐこれまた　吳山
春の月相模の木屋の石ばり　越中　五貫
うぐいすや神にゆづりし春の月　左琴
なの花や九ゝ九ゝ九ゝ春の月　成美
春もなる月鶏卵ゆ孵ゆ　公
ちやすし柳にさゝる春の月　公
春の月人ゝのいとも沢山たゝ　三顧
ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ　宗木



春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ　可都里
うゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ　公
おゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ　公
片ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ　喜角
春の月あるゝ人ゝまとる法良ゝ　道彦
業平ゝ一期ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ　公
春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ　公
月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ　岳整
春の月拾ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ　月居
人ゝの乗ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ　素堂
いつ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ月ゝ春ゝ　春元

舟拝のうまもいとやはるれ月　寒山
春の月に負の麦つく仏あれ　玉甫
ほろ〳〵と雪のふりより春の月　冥く
鶯白ひつゝあるもおりより春れ月　魯源
月更る尾とまをはるへめり　玉屑
とかくそもふ松にあるをまの月　宗
春の雪の月はいてゝいるの上　木海
陸人の佛ひろ名まの月　于當
夕ひをおて出り春の月　漫こ
春の月うれ掘りんにつく　若人
春れ月ひろひろ所りつ　葵真
ひの



春夜

心ハ春のとよ出るハまの月　呉老
賀送る門ハ爲ひの春の月　陸奥　白扇
糸旭の一ひ著てまの月　女　濱藻
為つゝめ才とひと春の月　蘿本
めつ〳〵月ざまの淡るれ　月洛　百樹
落雪のひのれ出ひめ春の月　陸奥　南平
居凡そに賀振舞やれ月　雪紀
道茉の裏ひんゝ春の月　越後　國九
夢れおやう青嶺のその中に　菱村
まの雪やはひをなりしるゆる　晩菊
春の夜や拍ひまれ拍車　仝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

## 春宵

雲の春もとまりて夢ひとつ納まれり
雲の春や風のつれなき濱の松
雲の春もとまるかしこまる鴨哉
春ハおとして人来て雲を詠ぬ
雲の春ハ夢と遊ぶの伯あるか
雲の春や森てゐる人に小蓋
雲の春の一の不なれも簑
折折に春帽のかりまの雲
以遠て孤伯ゐり雲の雲
松の木ハよれ風あり雲の雲
雲ハ春の自ものそ

漫々　双鳳
文卿　桐栖
梅夫　桃雲
杜年　姜村
仝　方水
素卿



鷹ハ春の地　鷹ハ春て春の空し地の春
殘尾鷹　是殘ゆる尾の鷹ハ春
狗　狗　分入て黒き狗折ハ狗　狗
狗　山　鷹百ハ狗ゐるゐるゐるゐるの月
鳥　鳴　鳴るゐる鳴ハ鳥ハ山ハ春
鳥　交　交ハ士の交ハ地ハ鳥ハ鳥
書ゐるふゐるゐるゐる書ハ書ハ書ハ書
鳥　巣　鳥の巣の巣ハ巣ハ巣ハ巣
巣ハ巣ゐるゐる巣ハ巣ハ巣ハ巣
鳥の巣ゐるゐる巣ハ巣ハ巣ハ巣
鳥の巣ゐるゐる巣ハ巣ハ巣ハ巣
鳥の巣ゐるゐる巣ハ巣ハ巣ハ巣

かが　其友
向雄
江戸　鶯に
笠老
仙に　芳之
道芳
大和　和山
向雄
仝
百明
保吉

鶯　菓

菓出る

鶯　菓

おれの祖も菓にてなのやつれの
菓をえんれいるれあるをいをり
菓れなのいあるるやあの徒
あく先に菓をるゐてまの閑
面のをくえんていりこむ菓をる
タ山や菓に鶯るゐす拵くる
菓のをやれ新るの年の月面
鶯の菓にえんあめをいをくの
堀をこえれくるの菓を出る
かくれ年もあれ徒あ
山里やあれくまてゐるのの

道濃　雲雀
月代　左文
一菓　鶯石
雨塘　新
枝長　女千代
拵れ

本広のけれ鳥をこれすむ徒ゐ
鶯のけくをちをふるゐ徒るれ
人の新の拵本の徒るをくれの
面のあるるの又ゐるれ徒るれ
すの尾の花をれえるれ風れ
山里やる鶯るるのおくるる
虹のれれれすれ雨れゐるれ
かくるくるるれ風あるれれ
おるれれれれの伯れれ傘れる
をるるけく老るれくれれれ
作れ来て州菓のるるれれれ

茅村　菊左
晩墓　合
合　白梅
几董　二柳
雪解　百明
保左

斗入
仝
寸楽
五月
抱九
琪六
柳荘
士訥
仝
仝
書翠

天老
擇雲
弓市
華泊
可歌
仝
一草
仝
尺文
奉九
仝

道秀
合
乙二
月居
月化
寿閑
雪笠
一茶
魯隠
樵雲
少海



梅閑
秋峯
夜来
秋夫
我少
玄卿
画翁
素月
樹翠
雪尺

藪

春のよたとしてまてしの春
よしの春藪へまるいちつめ半
いとしなる情ハらして藪　約
つはくれ山田の風に吹れ長
藪ふすて夜蛇をうつふかい
大津画に書屋一り藪弘
学れ中の横幅きつはめ
乙名やあの弥美の藪に
村ほし　乙名つるむ門
乙名のつれわして流臥
云名や良ふれ寒ふけ徒

春流　肥前　虎鵬
樗丸
茲村
仝
仝
柳居
几董
仝
曉甚
蕪村



新乙名八歩の藪を問もつめ
人倦て乙名ハ傾ふ長海ふ弘
法華のつれまるつるて乙名弘
乙名のちつけ抑しも押弘
新乙名ふけてそかの心惜ふ美
乙名のつれ親ふ弘夫婦弘
夕つけや海苔ふ廉ふ来て吟藪
云名ふよそこハ美人の信入に
灯にまれて良ふ乙名弘
乙名の燈ふ名ふ良弘
法木つむ井を乙名の徒来弘

自雄　仝
仝　也有
百明　保古
然来　猿左
五明　琪道
士朝　仝

沖つ鳥ハてるもつれなり
雨風に空定りて恋てる
つ屋てるその人さし流の上
夕てる月分ふ月望月あてる
慈来てのそはけハうれ月ふ月
旅人に春ことはしたるてるれ
てるの来てにとれもされ
去るの来て初めの砂のか夷
てるや恨きかれ巳出
きる来てのやつりるもゆと
てるやあまし拾ふまのもの

完来　戸
玉屑　鵬
一茶　孔阜
瑞る　一瓢
三尾人　幽庸
護地　鶯少

執れるかよるふもんめつはめ
位果の有大事るてるれ
てるや来りるもあの巣れのる
生宝れあるふ飛つはめれ
えて者れハあ所いるの恋の巣
徒や樫にやいるくメつはめ
夷る に新を生て毛ま
ハふ木にやこるやてえ恋
思雨や鶯をめてれハ鶯のう
飛のるれ思ふれるの鶯のあ
来のあ人に殉るふ考れ

備後　文角
枕南　尾
晃洞　仕法
六興　伊岐
糸力　太節
成美　寒松
向梧　上野
笠庵　向梧

## 松花堂

春雨

[illegible]の切れ目にかゝる
[illegible]の煙くゆれ
[illegible]を踏る[illegible]松むし
[illegible]
[illegible]
[illegible]

春人おもてのふれし
苔むすつゆもまろぶる所ゆる
文殊やアのねるる演車
風そのアをゆてアるる金殿
乗るよりもめてなまおや海ア
おかうちに鉄鉢に対てるア
海るそとうの不短 屋の尾
海雨して海めアかちりの
大のしハ海り尽して雨ア屋
アをてあるをるる行れ
美吟も海るけかや花ふ

会 来蘿
保吉 几董
来尾 諸九
岱来 五明
斗入
徒爽 露秀
琪道
恒九

士朗
摂堂
巣兆
会
成美
会
一草
力居
会
大阜
養机

三春二アをおり孔て完ア屋一口
あけるるしるのみ中より海ア
りアのあるをるるるるるるる
ゆるアるるをてのさんうの恵
るるるるしめりて海屋
焼筆屋ハ春もアをアて海ア
るるるの主のまりて海ア
海アおるるるハまの主ちり
一おアて一和ゆ海ア
屋の素海ゆる時やまるる屋
海の春ハ秋ほるアのるるし

ゆく水流はとこまてしらとそ
りてはつるしめゆる春の
井しらかく流のみ山の松
去ぬ人をかなしみ歌
ゆく人をまつ人ふ来て住吉の
岡の人おのひ今しまゆる春
時雨てけるそ人うやし
ゆく春をつかしかれたる
松ふる山路小田の人
りん河つる風小田の人
大井の井を流れつる

鈴木田道考
乙二
羅風
百池
蕉之
横雲
尾金
奇岡
玉房
雪橋

りしかふる時雨ふるやかの人
人ゆる陽の菜畑ふしをぬ
射笠ふ雨ふるおしへとゆる春
ゆる人ふくもくもくも

## 雲雀

麦のあしおそれても逆らひ
ひらはへて風をもとしゆく
ゆるるとハ人のうへとも思ひて
りてするものいひ不無此上
ゆの春やはハ三等に行き雀
川あやひとり鳴き太ひて
ふつつ使ひ東に入れる風鈴
独垣のくれにより揚ひ
雨雲やかそのみして鳴ひけり
たつや雨雲雀すこ孫を宗雀
地智作ふて作そこ雲の立を雀

詠序　吾友
女　演藻
湖舟
閑更
仝
女　子代
暁基
仝
向雄
仝



舞ふこ雲みハ鳴ひを雀ひ
花ふ雲ひ雲出ふ雲ひ雲ひ
心ひの根ひを登ふを雀ひ
大鏡ひ拾ひ以ひ舞ふを雀
を雀ふやへふりと雲ふ二人連
みを雀ひ拾ふ雲ふの雲を雀
雲ふこのひ歳て仕雲ひを雀ひ
やこその雨や雲ひ雲ひ雲を雀
雲ふひ眠ハ雲ひの揚ひ雲
雲ふこふて雲ふて雲ふを雀ひ
ふりしひふふこふ雲ひ雲を雀

伊勢

柳居　為貞
蓑太　士訥
几董　芳之
雪醉　成吳
春鶯
伏来
琪六

舞を花尾上の松にのこれるを
ひとりゝのこのやうなる梅を花
ちる梅の汀をみてゆくを花
月事をなるやを春の川に
山陰や穴さへ霞ひけり
来きとをらずしたるを花
然犬杭も忘れぬかゆを花
屋敷をたゝへてゆるを花
山風のを花にすれてのゆる
を花をとをしと持ゝれて
むこうゆるゝ心ゆるてゆるを花

一草　大阜
乙二　力化
道彦　祥采
一茶　仝
高閣　鞭風
千影



を花ゆるハとけ安見笠の紐
をあ戸やを花の穴をゆるそゝ
彩る井の雲をつやゆるを花
ゝも来て阪ゆ流をよゆるを花
水の木にやゝもやゝ舞を花
をゝのゝを花ハ流ゝ舞を花
を花ゆ麦田のゝの松ゝ
山花も才軽にゝれやゝを花
ゆ雲花ゝするゝゝ同穴
俳諧ハ梅の穴とゝを花
を花よゝはのをいの蝶いゝ

梅岡　を花
漫ゝ　桐翠
洲中　有非
四人　雪流
護花　南溟
琴別　宗波
一向　李流

## 雀子

一日毛ぬけてひよわれすを雀哉　春哉
ひよろの青やを雀の落る時　筑子
雪雀ゆてやけめりれ心　筑海
きさらるほと長月るを雀哉　糸鶴
さつきやふるのそにゆを雀　河内
光りはしやけ心や新すめ　八之
雀るれかれ美の衣の数　太節
又扇のありるを外に行雀　茲村
雀ふを巣にをりる人の新　素蘿
ふをとよりれ雀のおのふるる　士朗
巣をるのいけれるやすめれる　めも
　　乙二
　　道彦



## 春雪

ふる法て朱の美れ人て雀れる　糸
をすしさ繻もするて雀のる　應英
雀るれをやしれるのれ　素迪
外にいを梅にいをやの新雀　一茶
すしれるるもるれ雀のる　仝
簡雀や雨和をる巣の雀　五芳
杉柴ふれもいとれ新雀　寺閑
女のる先にるれすめれる　右雄
海山肌ハをれや雀のる　向羽
妻のるのるれるれ地を踏　孔雀
雀るまれも行れ　長翠
　　撲雲

## 蝶

妻の名ゝれ妻れてなりけるか
とゝまやゝ春れ来るそへまの名
なゝなのとけなゝそまの月
なのいとてゝ弥生と年よる蝶れ
蝶〳〵や弥生人を年てり　戸
みの蝶やゝ松の雑に越てり　丁濤
とゝりも美みの井の蝶れ　月醉
蝶〳〵や女のあゝやゝま　千代女
釣のとけとまて晩る蝶れ　美村
蝶〳〵や春れ　拙ひて傳きん　乗之女
初蝶のちゝさゝものに孫る　白梅

道秀　三度人　桃有　柳居　公　晩蕉　雖又　閑更　蕪太　公　烏明　佛仏　秋瓜　牧原　保古



海東まゝ入れ蝶舞ふ麓れ
蝶死て風なるまのとゝまゝ
蝶の数世いつれのそれ結ふらん
残板の裏れゆゝ板蝶れ
つまむゝと酢味噌を舐る板蝶れ
一ほの妻とゝとゝの蝶ふつ
てゝ〳〵やふゝと出てゝる雨とゝ
成る蝶れ　おゝまの面へのつれゝ
蝶〳〵やつゝあゝ弾ゝと
めゝる板蝶れ墨つけん　椿の先
初蝶や松の枝の葉や挿ん

塚にめてゝ紙いんかのふれ
はのまゝして篇にとなる故塚れ
塚乗てるゝ上の人を片〳〵の
塚〳〵の人を変るる孔情れ　伊勢
天地とかゝるはもと塚のたゝかれ　左竹
ちる恋にかるゝ事ゝ故塚れ　夜亜
つゝゝゝとすれハ塚い塚ゝ事ゝ　江戸　春海
墨の恋のゆゝ塚のゝ事ゝ　士朝
こ墨ハ塚にハ変なるゝ事ゝし　業居
塚のゆゝえ人もちにゝゝゝゝ　成美
乗故塚ぬゝることゝ事ゝ人ゝ事ゝ　仕湯
　　　

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雄剛　一茶
仝　蕉雨
江戸人　枝長
女　濱藻
筑前　雲関
江戸　巣也
　　鈞義

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

蜂

[illegible]の[illegible]のそこてんの
蜂の巣や一同くに見分
蜂の巣や四方とて蜜塗れす
蜂の巣は蛇なきし蛇なきまま
雨れるや巣をとめくるみる蜂の
巣をたくる蜂のひら二つ
本陣の向ふに蜂のいるかな
蜂の巣や十つ十の親を見し
巣の蜂の親をくるる出入
蜂二つ海棠に巣を作るか
蜂すくむ蛇の恋の乱し

京 蘭二
摂津 杜例
大江丸
豊 肩吟
肥前 樹花
向雄
保吉
護路
肥前 幽雅
向雄



蛇

蛇の来てんたらすやすのみ
うら市よの巣見えや蛇の音
吟は(忘のちるる蛇 [illegible]
海星をくれて蛇寒あり
初蛇ふにいるあ寒あと
蓮生に対を打のてちる蛇
月まれいるの影とちる蛇
ふくれてうくるあれ蛇
蛇寒のあるさうさ蛇 [illegible]
寒周やうを踏ふる蛇
はハ日暮ハ寒ハよるる蛇

布序
肥前 はしめ
柳居
向雄
仝
晩春
蓼太
仝
秋瓜
安雲 凡律
芝村

雄子〳〵井に麦洗ふ月夜哉　九董

一ぬき葉筆にて花こぼす雄哉　路山

立よれば蘭の香に染む雄哉　蘭屋

花見に行おそくなる雄哉　雪酔

田のあぜのうつくしき雄哉　麦蕉

春の夜の赤い老しわ雄哉　斗入

雄鳴田のあぜはあれすぎ　仝

風を吹かりつてゐる雄哉　爽鴻

雄子千鳥の清水を呑む　徒来

鄙暮しあれば雄のさゝやき　蘭二

よく聞く雪の中よりの初雄　麦蕉

夕春のあやさきまあの時雄　戸女神菊

ねのうけれにはめつしそ雄哉　夜亜

雪の庭とりの休めて時の雄　戸浙江

入そふ〳〵雄かゝてゐる雄　士朗

ゆく〳〵と雲に出なの夕雄　仝

深沈む春のくまを時雄　仝

雄雲ヶ丸れそれの丸薹の新　青岐

月夜のとれ春りそれ春と時雄　戸雷馬

村のう春の足元をしきく雄　策居

赤友の来へき育と初雄　一醒

松風やうつ〳〵に来てなく雄　成貞

雉子啼て夜明ぬる花の上
春の野の清るまて啼雉
啼すしらぬ明方の風
雲かくるあとむなを啼雉　轟
曉やきるまてなく雉　澧子
田一枚をてはまそとなく雉　祥禾
かくこそなるハ麦ひく雉　可新宅
嫁入れ麦やとのまいて啼雉　仝
いて田あれとも人の雉　道秀
麻の種之粒おてもまく雉　仝
親の新し見あわるるの雉　九化
仝　乙二
仝

ゆるゝとなふ伸す雉
まんもうきにをあくとて初雉
啼やめハかゝるの雉雉　一草
見覚の雉ちゝ庭の雨　蓄之
板をてまめの色たの雉　素樂
麦庵や雉初ゝ老を啼　笑老
さゝ山八人にてよを啼雉　一茶
今まれ山に暮ふ雉　仝
死ふて雉ちゝ一枝小麦　蕉雨
雉まゝ泡ふいて居る屋敷　雪塢
小田の雉啼ゝ　寒松

呼出て打の音にのる蛙　桂雲
淵茅生の人と云て呼蛙　寄閑
孤燈て夜ふけてやうく呼蛙　定人
雨晴の跡をしたひて呼蛙　巡晴
その月をうつす位なる蛙　江戸　吳羊
呼蛙夜の雨わかさし　不孤　茶亭
夕蛙後のふるさと言のする　木芳
よく森てのの後耳に入初蛙　雪长
ふ〳〵と切をかける蛙　由之
呼蛙まのゆくもたちて　浜洲　来也
呼車のあとにまつる蛙　毛孤　由律



蛙

田螺

雑用の勝をすく蛙　風　至に　蛍雲
すく蛙芝の道をまもて同　江内　竹有
釣乳や他人のやうにすく蛙　雪尺
兵士を呼ふる民蛙　尼　素月
連るもゝけたる蛙　風
森にや松の元する呼蛙　不孤　吳雀
蛙ふや河をもれぬるの音　松葉
蛙ふや河をもれぬるの音　埃美
蛙ふや打のれ抱にもに塔　擎雲
蛙ふ長てるるとゝのもの如まき　丈左
抜に孫すを田すしまの文弘　力化
　　蓋村

蟬

初鹿

松風の末もとゐなるたるみより
玉水はたるのゐなるにおちまさる
かくまでのすそとてなくなるかな
松風もすゑはよわるしの葉にて
桃さくの櫻さけるまたなし
春の木をかくれなるをよしのを
たれなるわかはいしい蟬ぞつ
鳴たるしなるめなるものどもの
あまるあしはすゑにて鳴なるし
る刀堀をゑで鳴るこゑ鳴れ
春はしるこゑ柳の下の小舟市

尺文
菅三
少仙
廉古
筑前
玉我
丹後
桃之
筑前
接節
秀九
肥前
大嶽
几董

白雄
保吉
仝
五明
理斎
不求
士訥
江戸
花縣
摂雲
松兄
祥来
道秀

飯坦

飯坦とひつてるや月のけ
いひ坦や麦にのへたる軒の市

寺居虫

分の屋をとられまつる蓑虫
すめばするこ里すやもい秋寺

古秋寺

地虫

そしあれ世えゆるのてけ地古宛

猫窓

ひつ寺の猫もふすめる寒窓
氷ふ窓猫やゆく窓形ん
寒の秋に見つ風れつる れ猫
窓猫のほてしもなきもすし
ある時ハ招笹にゆて猫の窓
おすひ春れ尾に抱もし猫の窓

天外

安藝

金蕉

樗堂

天外

四人

閑更

白雄

几董

晩菊

雪酔

蓼太



洗ふ寺春のうきすや猫の窓
猫の窓猫の死看るつの秋
蔭垣に分を乳猫の面れ
寒の猫ふ〳〵搔をすくると
とこてやう肩のれたる女猫
ありひあまり猫ふちる雨春
窓猫や分ハあてみの春れ
ま猫の分しまるの秋
ひるに一春ハ習へるれ窓
猫の窓逢春のちて気と
それるて鍋の特も猫の窓

仝

有明

保古

五明

仝

大江丸

羅城

露秀

士朗

樗堂

巣兆

おかしろみ受うけぬけて猫の恋
うち忘れ良にいねそな猫の恋
駕籠の中一つ床とさんで猫の恋
ひとつあれたの猫の来る来て
よのもれ机の上のありひて猫の恋
併寄生の清もんで猫の恋
恋猫や七尺の塀をとり越
猫の恋して起のまもるにそな
ふるまの去て仮れ獄の恋
恋猫につけてやうつも貝
猫の恋忘れやうに出たり

五雄
完来
一草
道芳
公
養机
吾庵
伸高
奇閑
蕉雨
去高



## 春鹿

尾の尾を踏て逃る猫の恋
古猫や生首の原に恋の声
猫の恋汁の南門の恋の深
ゆか来る猫の尾貝や柱木枕
枕蒲団によこる猫もまぶしる
猫の妻柳絮人をかしそな
恋すれ猫もてこれ力おれ
うろくとそなる恋の強鹿
あるまよいに沿りや恋の鹿
恋ハ戸のの鹿さん角ふるうな
たよくと旋にこれそな鹿

ふる
三度人
方和
秋峯
與人
星譜
太節
白雄
鹿古
竹丈
大江丸

## 鹿

雫麻秋よりそのの気し　浜谷　唐来

鹿為角　為て為る角まり女麻ゑ　閑更

角為て脚けし麻の良　壌爰

秋やなるまの心麻の角為て　向雄

いつくへ向てや為し麻の角　保吉

角為て麻よりし麻の足角ると　月村

あまれ秋に為ば為して麻の角　陸奥　為元

為角やうまるまり物の脚　江戸　南山

小男麻よる拭のまん角の海　錦城

乃芝や高るまりしまれ角　丹波　一茶

けうふや笑人にたをつめる人　春湖

芭村

陽炎

けうふれりて塔るつ松美ゑ　白雄

かくるや其の美のしまりつ　晩臺

出祢訪や陽炎を出る波既　几董

陽炎や海うめれなる陸屋　仝

陽炎の掃よりて為る屋炎ゑ　蕪太

陽出や畳良そくる美の屋　保吉

けうふの井ゆくられ城ゑ　仝

陽炎を供まりのしらさき　綺石

陽出やつ為し地ま　士朔

陽炎や紙のよふ炎まて　仝

斗入

河内
伊勢

河内国にて多くしたしの家
ゆくゆくは不寒一茶
河内や梅の花を越るし
河内や三月活のうる埴の鉢
河内や春八重咲めてらん力
河内や生れつるもたつ沸生れ
河内国にて奇岡
河内の国にて蓑の花
本郷にて河内をかくる所本郷
河内国にて蘭
河内やそこらを鶯の宮ゆきみ
河内国にて廣陵
河内国にて揚るこゆ
河内国にて吐丈
河内やそれるも古芭蕉
河内やなる朝なる枕の氣
伊勢
河内国にて力芳
河内国にて周路
河内国にて水尼
河内国にて安南
河内国にて園東
河内国にて白雄
河内国にて仝
河内国にて保古
河内国にて吐丈
河内国にて瑞芝
河内国にて長岸
河内国にて星溝
河内国にて醉

糸遊

初雷
初虹
春雲

河内国にて八重蔵
河内国にて花の上
糸桜の乳つくて出つるあり
糸桜にて夕ゆくと角樽
糸桜にて四人の瞬まやさしさ
いと桜や打のひあるの外掬
いと桜やほのぼのとさくの秋
糸桜や切をたるる外軽き
初雷や傍の力垂の古ひより
初虹に蘭の芳を拭てる
風中しるしる著にくり

向雄
仝
出代
曉墓
晃秀
雷雲
士訥
弁六
乙二
道彦
仝

出代

一茶
雪笠
雪雄
布席
茶遊
茶彦
由之
義村
白雄
仝
曉墓

## 焼野

蕨の山焼代男をしまめる　保吉
出代のうるに来いふる風　五明
出代やあやめぬほの杜ふ　午心
出代やいつも勢ひの糸　一茶
出代の糸ずもよるの縄　麓　宿
川越て行るの見て焼野哉　冥土
来ていかゝ雨降焼野哉　蕪村
越すひて佛うちも焼野哉　白雄
中〳〵に焼て焼野の表辺哉　百明
白ほのあるてふ〳〵焼野哉　三顧
ゆき焼やあのあり八松の月　素記

## 山焼

〳〵よりの流る焼野哉　蕭雨
られて〳〵松の月ちれ焼野哉　李尺
山焼やほのぬたてる一ッ庵　白雄
を素徐の乃つけてとをやく　蕉雨
うちの人ゆきもれとを焼　道彦
焼山の時ちれやいつの乳ち　武雄
白雪のとも素やく久乳　右雄
焼ちよ物ちゆめ蓑の月　芝雄
骨折のそ山やゆ田のあ起　美作
蓑の弁ハうちも折れぬ表田哉　舟
田やう尻の焼ちらと谷の底　意雄
　　保吉
　　兆

鈴亀の山月色て田植哉　伊勢　蕉之
あらのやうにみてもうゑぬ田植哉　来年
植みて今はうゑぬ田のちまき　俳諧　東翠
田植や素麺なんとて暮かゝる　芭村
田植や今はうゑぬ心にて　仝
畠をやゝ緑みの杉の雨ぬれく　巣居
田植すて雑も蛙よ雨もし　成美
畠打のくもりし唐の菜畑哉　力化
田植うゑやうまれし雨の雲　桐翠
苗代や踏んとする路ひとつ　柳居
苗代や夫婦のもてあかす城　雪酔



苗代

いとまうまき苗代の蔭ゝの
苗代に陽炎ゆる秋田哉
素の間苗代のみあつるとく
苗代に雪のおもうく山田哉
撰出たりあめの日の苗の出来
あもすゝ高の雨や種俵
古川のちゝ高の雨や種俵
丁八幡野八いつゝ人種刀
月出度さて苗も作りの種下
種ひて鍬めてたき蔭の風
はるすみ種ゝ蔭ゝ小菜畑

蔭下

あに蔭
種蔭

向雄　仝　保古　素丁　乙二　芭村　仝　向雄　多酔　青人　冥ゝ

麻 蕎
種 芋
木實拵
燭 佐

蕨

陽炎の井へそなれや麻の粒
三日月の探り捜し芋のうれ
こ人や蕨ゐて木実拵る
うとの丸や明に下ぬ〻こ山の光
蜂しさハ〻ぬ〻うとの白ひ
小松みの蕨柴廣て来ぬ〻
蕨みやいさもの夢ん拵てし
めくるはや指の染まて蕨折
よ蕨の尺に余てこ山ゐ
芋の井や除こ蕨の茎ぬ〻
よ蕨や二日月ゐ〻のう



樗雲 春雲
雨丹
乃麦
向雄
夫こ
几董
茂村
向雄
保吉
一草
枝也

## 古筆

こゆるハまるこんあとけ〻ゐ蕨ゐ
よ蕨や笑の〻ゐ〻のこ〻めるこ〻
こ豆や芋蕨ゐ垣松ゐ
芋ゐて仏〻まつやゆ〻し
ふせまゐ十ゐたこゆ〻て
芋〻〻ゐ〻ゐめ松菜ハゐ芋
抱打ゐ〻ゐ屋てやゆ〻て
秋のゐ〻ゐ芋のゐ古芋
雨ハ〻ゐ〻つ〻ゐ〻ゐ〻ゐ山畑
みの末や芋ゐ芋ゐ芋ゐ古芋
ゆ〻〻〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ

菅三
戸ゐの
文角
千代
向雄
仝
笠老
寒松
力芳
筑ゐの
丁〻
太節

杉菜　苗杉のひらけたつすまれい
子鞠の苗むす人杉菜子
こい懐のようにひるすまれい
御菅生の人霞ゆつよあれい　七口　東明
はへもすも放意むすへいはい　乃亮
蒜養て表打しろ歩て今　傳奥女　春翠
いるとも折る本きて人の香る　乙二
いるとも燈すらす松の本　蓼机
りもやふいるとも俤みとち　青閑
いたとも奥に打る書るい　吉房　素共
帚杉やこれら先ハ果るる　蓑狭　碧向

蕗　菊花　侯
胡荽　雪笠
蒜
帚杉

○百二

代りて書
草　芳
蕨子の芽
草の芽
春草

秋ものの芽ものとりあつて書
沢ひたすてはもとりて書
彼保姫の芽のもの芽しき
いつとるく松ますてやしの芽
果ハ蓬の抗てやとうの芽
の芽ゆ佛いくやや芒　原
表のとうへひつるは数れ
一色にいろくとの青れ
ふとりとの表てのもの芽
蕨火と燈すれハるのこ
表のとるる卵をこの今

千心　車大　文兄　晩翠　水郷　蕨　白　焼墓　白雉　士魂　羅城　丈左

蟬のゑ寺越てさるゝ花そ
春のそらにはせ上り
生れ落るゝ
はゝ山に入て
春のそたつ
古てにゝ
拾ふ花鈴
春を花
春を花
あつ
春の花

若菊　成美
百姓　一茶
布袋　遊亮
仝　乙二
仝　寒松
百姓　孤山

春之英

九月にあそ春の
そ春れ
春のそ春の
ゝ
春のそ夢に
人乳
たつれ
田
たんぼや
たんぼ
ゝ

釣船　吳老
似藻　星信
郁賀　東茅
曉基　百明
秋瓜　響窓

たんぽぽの新芽の焼れこんかや一めんかる芽と成たんぽぽの新芽より之の芽の表たんちや菜に似て蝶の形の次自たんぽぽの芽に咲黄色の花石原やこすりまるの花菊蝶の来て化粧する前れ花ふくら曲て蕾の書こふ前れ花ろうの古芽の中後に芽出て丙芽の両指こるはてるるのたり

年心
乙二
道堯
仝
秋夫
白楼
丈古
井冠
廿伍
唐人
春喬



前

芽

菜の花

芽の蕾古菜の留るの原花れるれ花や乳のれなるこ留なの花や月ハ来にはハ花れ蝶もよられ海蕾ぬるの花や鼻のようれ花の香れ花れの匂れハ甘くれてれの花れ蝶この両れるれ花や蕾れハ来れの蝶動るの花世界にるる入はれるの花や麦に交りれ咲るれ花れ油うれて唐りれ

直賀
寸雅
上総
天府
芝村
仝
蝶美
白楼
晩春
仝
深て
江戸
玄武
代素

ちるはなにほのめかしたる春の名殘
ちるはなのなごりをしみてさくらの
なるはなやさきそめしかのはつ風に
ちるはなのなごりをしみかねてはる
なのはなにたゆたふる梅の風
ちるはなのやはらかにてはるく花
ちるはなのゆくへはいづくしら
ちるはなやはるのゆふかぜをまち
ちるはなにそこはかとなくあふ
なるはなやはるはてゝのこるき
ちるはなやいつまでまつの雪

仝　保吉
仝
井入
士朝
仝
術江
巢兆
成美
一草
江戸　素行

○百五

見もはてぬ　思ひのはなのゆくへかな
ちるはなはとまるとしらねどゆくとこそ
ちるはなをうらやましがりて春風
古畑のちるはなはなのおくれ
心空やうれちるはなをおもひて
ちるはなの白ゆふ風の旭の風
なるはなの白ゆふ風に負まる
ちるはもに藥屋投られ添ふ
ちるはなにはのまくらゆふ風
ちるはなの白ゆふ風にふれて
ちるはなの一すぢやせは月

月化
芳閑
雄閑
椿雲
我少
角米
巢也
玉鬼
雄夢
雄は
双鳳
桃之
枚也

きれ花や雲の高て二度鳴る　壺人
松明にきれ花葉はしぬ　泳鳴
きれ花にしるるも月夜哉　白民
なの花や波ふる落てゆく船　支鞍丸
きれ花に大根ひまの花咲ぬ　成美
ゆくに大根のかのうつくしき　文晃
秋一さかぬめも安心大根　文角
人はみな秋をつくしまゝ百姓　播丁梅廬
をしるの食にうんどんげ　常陸義香
えふるにうに味ふつゝ蓑　河内冰月
泥つまてゆしふかぬ行のふ　乙二

大根花
豆腐草
山蓼
鳥羊

茅子苗
菓植
播苗
そし木
接木

茅子苗
菓植
菓をかる情のうすき菓の苗
菓をつゝるなうすき菓の苗
播苗
播苗を分ける世話をとられ
種苗そらし二坪の播苗
三菓まて植たしたしたし木
植越に手の手伝る接木
庭中にあるし風に接植
さうあるに接接やしきの梅
接木して花咲と実に乃うの
うつゝの八接木にうれ人に

雪笠　古渠
白羽　白羽
瓦金　二市人
道光
菖村
白雄
保吉
成美
尺笑

# 初櫻

湯殿にかゝる櫻木の
春にあれハ咲しなくさくらの櫻花
あしたゝふあてハちるれと櫻木の
ちしよのまんのひまを櫻木の
晩霞の光にゆりあふ櫻花の
行うくハ櫻木もやはしこのあ
みるしてゆ合きゝの初櫻
たゝ戻るゝて来るに初櫻
雨九あるまひまの初櫻
あゝ名し美もひゝを初櫻
咲をさへ踏るゝたる初櫻

奇剛　一葉　一駒　素迪　紀の忠文　持麿　樗良　女千代　曉蕉　几董　仝



初櫻花のゝ光をゝる孔
雪たに春の時ハ蜂し初さくら
美しき拘さこ夫之光櫻
初櫻力ハふよりいつる孔
初櫻まのふハ辛の序を
初櫻羊櫻美と語るより
雨九あ中にまゝより初櫻
咲初るよりあまりある櫻孔
まゝひゝつゝまゝ光来め初櫻
初櫻花の世の中よりゝ
けゝゝゝゝ美に笑し初櫻

常座

佛仙　保古　大江九　五明　結石　似旭　素岐　恒九　常南　樗雲　仝

さくらちるとゝのうさよ初櫻　百崇
あるるとゝ出るそ佛一初櫻　道堯
切れたる恨ありやさう櫻　仝
春風のまのみを吹て初櫻　一茶
かゝれかあや金のうへの初櫻　瓜坊
ゐるしとゝいもあるまて初櫻　蕾之
鶯ゆ人立かる初さくら　菱亭
はやくと霧を晴の初櫻　长為
初すゝ鳥鳥山まて初櫻　寒松
残れさへふりそゝれて初櫻　雪笠
初櫻金れまれのなるゆる　岩間



初櫻仲ハ花もかつ　路　　雄閑
初櫻絞ハそもしとおりれ条　京　　為美
泣事ハ月ハかさゝれと初櫻　　湖中
角文字やゝ世ハ乱まるの初櫻　　兼也
ゝ奥まるの吟れるまて初櫻　　武義　　為頂
初櫻弼まんをとりされつ　　一阿
雪も咲いて居るまて　初櫻　　竺為
鶯ゆよまつのあれの初櫻　　白戸　　澤笠
鶯ゆ残れ立てゝるや初櫻　　春乱尼　　為兵
笑ゐにひしのかゝの初櫻　　浪法　　吾崔
兼とれハ墨の初櫻　　大和　　墨淀

待花　　紀ほか　崔湖

初花　　たまほか　月英

蘆葦も花おほくの仲ゝ哉　　由之

初恋の二なくてほつ咲　　弁六

初恋のちる時人にゝれる　　乙彦

袖たけや初恋横咲にゝ　　一葉

初恋やとしよりこいとゝる枝　　寒松

初恋や梅のゝうへにおぼゝ　　五城

初恋の秋にはもるゝ月の影　　太節

秋錦にひゝん横のちりにゝ　　調雅

秋風やあるひゝん横ゝ　　可盈



彼岸櫻

糸櫻　咲ゝて春ゝあゝいと櫻

俳諧叢句題叢裏下

三月　三月やとしたおハ圓述る事　桂五太郎撰

三月や庵主の人仏もして　寒松

弥生　藪塚にちるも花見る弥生哉　敬哉

ふにもれて横着ものの弥生哉　百吟

菜畑ものも花の色の弥生哉　卓池

上巳　桃の傍も素白ハ一斗仏のもし　南溟

桃のはやト弥生の蓋　錄　樗良

ゆく起て桃を一見る三月哉　白雄

桃のはにふて笑ひれ来摺太木　白樂

遠考

曲水

桃の花ちるより老を抱れぬ　蕉三
ぬるやさに小貝を埋ち　白雄
ぬるやうしろはいて名ゆ　沙羅
ぬるや花すき花に下ゼ　午心
ぬるや芦の葉も名ゆ　寒松
盃よ流れこゆの力　一茶
ぬるや人のなつかしなる　保耕
たちまちの人すゆ不雛の鳥　蕉村
筆を出る良ゆすれめ雛二茶　公
ころんで笑ふてさゆ雛　千代
雛祝やゆりあゆる女良　多醉



雛祭

醉さめやほのぼの人ゆる雛の魚　曉雲
いさ雛の湯みゆれ流れ　蕉右
紙雛ゆるゆ　白雄
懸烏の自ゆ雛　公
弥茶て這ゆ雛のゆれ　陶東
雛の烏帽子ゆ樊大ゆ　保吉
雛の宿老の乗ゆ名ゆ　公
ゆ用雛のゆたく烟ゆ　芙蓉
夷ゆする雲ゆ紙雛　百明
紙雛や仲の雲中の人の家　左明
ゆれゆ流れ雛　斗入

すめは新鶯みれはよに田舞鶯
春の鶯ものいはて人ゆる
鶯の鳴る花のうけよりはなれぬ
萩ふる事の鶯の猶ふるは
鶯ふれちよりはなれ籠鶯
ものふこそ鶯いて鶯ふるは
鶯ハ花ふる鳥に書ふる
鶯物にほしまものとなるの物
ひゆく好逸業と極の鶯
ものいはぬ鶯ふるふ鶯の声
恰の春ふる春の鶯

五月雨　伊勢
陶石　かや
士朔　甘谷
仝　官蘭
昭九
樗雲
成英
三顧
完来





供のかゝて鶯みれ小町ふる
孤鶯やむつてうゆすふる
鶯ふふは数不思れ物ふる
来をゆく情ふありて鶯の有
鶯のふの梶吹ふれてふれ
鶯のふふ恨ふとおほふふ
鶯逢みまみ和ふふふ
迷ふの智恵いあ主鶯ふ
鶯笛をふれ新ふの汗ふ
萩ふけ下ふの鶯ふふる
盃に伽れかゝ小鶯ふ

可敬堂
仝
力化
道亮
素槃
冥々
葵亭
蓋三
蓋雨
雪笠
雨壌

雛の女誘れて来てさうびの
市の雛売の立しき所也
雛のなれ生れたるもの貴賤
波つゝ登れ調度の紙雛　素女
雛に毛あゝ〳〵ぬまの成小袖　錦城
油灯れのゝめ新る雛　星湾
古雛や鼻の先ゝるもの　下臣　秋方
寒れすれ方と雛の乳良　可外
雛掛や売て折る猫れつゝ　蜜
雛のなやゝんゝるもの餅　山
裁屠ハ女ゝめ〳〵ゝ餅　李足
漫ゝ　蕉女　素堂
会

草餅

ゝゝして四ゝなれるもの餅　下臣　故桜
鶏合眼を見ゝ朱ゝ紫と　晩蕉
三合すし上ぬ一鶏合　五明
寒食や堀ゝ立さゝぬ屑のゝ　半心
寒食や女すのゝ狭火笠　江戸　夢笠
寒食や戻れまして寒松　寒松
天の涯ゝ〳〵ふ人や炊子形　多酔
抱ゝるなゝゝろもの炊子弘　蕉太
子る炊や思ゝて戻る墓の髪　会
ま子ゝ人のおゝのすゝゝ　白雄
ふまてゝ見ゝ抜ゝる炊子弘　宗瑞

鶏合
寒食
炊子

安元祭

百明　吉藝　双軒　成貴　蒼也　一華　一茶　陸奥　等舟　江戸　三化　志ア　ぬし　摂州　蓮柳　晩蕉

百十四

壺ゝゝ此度八さゝ次手れ
大ゐやのさゆめくと次手ゐる
ゆらゝとしるゐの人の次手れ
松の蔭　ゝゝ此次手を著ゆし
海人の住家ゆる次手の風
人出れ旭も崔も次手れ
酬ゝゝ風さや次手此源氏
古器の酒うゆれゆ次手れ
ゆゆ義ゝ与ゆめゝし次手写
月ゆゆ次手八重の雲のさゝ
やすゝゝの忘ゆれゆ飾るゆ

安元祭

壬生念仏

陸奥　玉笥　下総　紙衣　江戸　横川　色ヒ　太紙　兼二　祐昌　乃亮　彼ヒ　壱二　下総　遍笠　向旋　几董

とゝゝや安元花ゝ筒ゆ袖
安元ゆゆ花ゝ十ゝて二ゆ酔
祇ゆゆ法師ゆゆ十ゆし古彼の海
墨染のうゝ海ゆ壬生念仏
ちる花の四方ゝ壬生念仏
壬生念仏忘ゆ壬生念仏
ゝ食ゆゆゝゝ事ゝ壬生ゆ
何事ゆいゝゝ壬生念仏
花笠ゝ仏ゆ壬生ゆ
吸入ゆ袈ゝ壬生ゆ
海ゆゝかゝゝ乃ゆ肩ゆ

永日

仏壁の色もいとゆかしき
拝殿はなほ永日のみゆく末
永日をあるかしこまる寿行
落書はあれどそこのみ
永日や暮れたれば墨の色
人の世もこうまでなれば永日
永日や春はいとけの夜の
永日や障子の穴の
永日や人の油断をうかがひ
永日や人の世のもとをうかがひ
永日や余所の住居をたつ煙
永日や旭さしかかるの窓
永日の東の句仲なるもはなし
永日や蟻の糞引の
永日や庭のやすらう庭の
永日や素湯ひとつまぐる
永日やむかしの小雨のふる

駿河　文政

蓑太
几董
白雄
百明
保吉
素丸

伝志　風雪
湖江
年仏
成美

乃美
蓑帆
乗帆
梅岡
竺高
與人
一瓢

京　青中
伯先
六美
松

東

遲

は

流するに水のとまりやすし
親とするに中にはきき蓋の孔
松と蓋とこハきするにあるべし
遲きなるにつきてきまりあり
遲するに蓋の孔の蓋の上
新年し魚付についてはこ年
魚桝に重するに新のつり 延
大津に著きるにさしたるに
心のきいりよりも著し
永太代と同じく重する比
重するに法をあらるるあり

京

○百十六

江戸女 丹波 應て
菖蒲 東尺
菖蒲村
仝
几董
樗堂
松毛
扇杖
乃老
馬詩

春

日

春の日に掃り事に心配り
手連て次本と拾ふ春日
独りに松の中より春日
春の日に日あるる春やまき
春の日に山ゆ桃論の新法師
春の中の日ハ誤の春日
春の日に白ハ跡の松の
春の日に枕に年し小路
春に向て孤千里に春日
ちさきに孔脚するにかゝる春日
ひとかに遠に生まれよりれに春日に新

京 蕉

京 風

菖蒲川
存亜
周更
晩蕉
仝
白雄
蕪太
麦蕉
然春
保岩
京風

恒九
合
柳莊
術江
士訪
出翠
合
薫平
成英
年心
五言

力化
葵亭
長高
寛松
湖中
出雲
桃夫
文兆
玄雄
英治
花六
京
管鳥
屋路

春之夕

炉塞

盈する者も祥なりまたを
夜の夕たくさんと寄る夜をつく
うゆきくれの笑れ、まれに寄う
夕暮のうくうつくまの陸
朝のあさこれきりまたを
牛の前にるふくまれ夕れ
まれ夕野のへるもつのちゆ
炉塞て二度あるれ
炉塞ゆかなるれそのこ
炉塞て一りうきれ
森郎うう炉をまうれ

閑更
芭村
仝
有筆
一駅
菊也
同九
芭左
完来
祥禾
一駅





自初

茶摘

炉塞ゆかれうるこのち
自初ゆ拾れ茶つる茶摘分
自初ゆ拾るの茶ふゆ茶の雨
れまれ夕野を寄れ茶摘の風
つうくて人あるる茶茶れ
茶外て平たくうめ茶摘分
れ先の松れつのくる茶摘れ
茶もつくめ松そつうめ丘の茶
旅人に笠のそうく茶摘れ
夕負の二茶ふもんて茶摘れ
茶摘ゆ枝に夕れ夕義うう

義猿

鬼水
不知作者
焼基
拾居
閑更
芭左
寄閑
一茶
吾友
三日坊
球夏

## 菜

菜摘の菌を八月の末の摘除い
菜菜ふ〳〵二月可生き春小
古ふ〳〵ちの〳〵弱や弱ういと
菜ぬもあるし芽人春根
仮菜や菌を春る春丸雨
やるうして春も高し春小
白菜に摘、小たる春小
雨二百春丸おそれそれ
菜とさまり丸ふ〳〵春付
雪丸や春丸春のふる言
いるれて春ける摘大歩

傳来
遠山
家人
朱峰

天小
晩菜
白樫
百姓
五姓
姫丸
丈左
れ毛



## 冬法山櫻

春間八菜菜ふ〳〵ける
自春の法菜丸ふ〳〵春小
山菜摘すし春れ春法仮
春あり丸ふ〳〵摘大の春ふ
ぬのふふ〳〵る菜の摘春丸ふ
別力八春〳〵丸春ふ〳〵山櫻
ふ〳〵ちふ〳〵雨をもちふ〳〵山櫻
峠まて丸八春るちふ〳〵山櫻
丸も分れ変ふ〳〵小ふ〳〵
山櫻いて〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵る
半ふるの菜新ふ〳〵れ山ふ〳〵ふ

常陸
城石
日向
安南
壇雨
南美
美村
左
斗入
左
士佐
椎五
樗葉

梅

山里みてうゑまれさくら山
しらぬ人の折て長きや山梅
紅霞ハ梢ちるらん山さくら
山人や梅に心ハ山ハ梅さくら
山ハ梅ん月ハ山ハ梅
山梅ん月ハ山ハ梅
物入て除山梅きすくさめん
寄るてもそれもまた山梅
内ゆ出て山梅戸といきはへ
山梅去ハるくとゆくなり
山さくらかの夕をくまさく

菜兆
平ん
不寒
大阜
可期
全
夢亭
楼壺
菊也
百池
汲古



ちくれに咲うめ山梅
ゆきやあすふまさく山梅
田畑ゆくのくるまて山ちら
黄初ぬ先ちるし山梅
山梅初ハ黄ちるく咲ちる
山梅人ゆもあはれ黄ちる
山の庵梅咲て人ハ来ん
破壁て月ちるし山梅
ちつ屋ちたちくるいさく山梅
山梅さくや例の涌くちき
油引して長ちる来さる梅ん

きよ
六書
岱岳
文角
美九
長友
来山
下総
志戸
酔鶴
信濃
小海
白戸
九扑
樗良

一抹こ有の[illegible]
横する人、[illegible]
[illegible]中ハ[illegible]
来[illegible]を[illegible]
自枕の[illegible]ハ横の[illegible]
横物海[illegible]
咲出てあ[illegible]
[illegible]中ハ[illegible]
[illegible]
をの横に船[illegible]
海の科[illegible]

柳居
閑更
[illegible]
仝
芭村
[illegible]
[illegible]
[illegible]
向雄
仝





川[illegible]
松の[illegible]横に[illegible]
横[illegible]
[illegible]
[illegible]
世の中ハ[illegible]
横さ[illegible]
人の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
君ら代[illegible]

重厚
保吉
綺石
斗入
仝
昭九
諸云
天老
士[illegible]
仝
巣法

咲るよりくさのあるあり樹ハ
撫ハそれくにあるる樹 ハ
折てまつる樹に孔の咲るより
聖るまてハ樹ハ春あつくし
又ぬり少くの樹ハ
樹さくそやまるき孔る
ものをたせるみ麻き樹ハ
いつまてもたのハ之あ樹ハ
かからみ寒ハあるし時ハ樹
いよ箱の木しるも花さう樹ハ
りみまるるほれる樹ハ

華清宮十六 下弦 梅沒 三鶯 可歌星 春雁 一草 養孔 戸南微 篤老 琴亭



急樹をハえてもおそあよ
寒ふるまれハ樹をよりやすき
魚のるあるあるるめしの樹
木篠るのかにうるき樹ハ
松あれそこもえゆる樹ハ
音に入る樹の孔をるのの
世の中をのもしする樹ハ
行春あるゆ人をえ樹人
行ふ遊さく樹源一期
いよしうせのるるふる樹ハ
る連にるのてをき樹ハ

長爺 木河 春閑 挾貴 武陵 一茶 四人 万和 幽味 双雁 漫こ

裏近うほめて吸ふ人の横ゑ　似葉

うつ里をくの人てある横ゑ　近江　文ゑ

梯木ゑに横沸う咲るゑ　官蘭

あやまて横う咲てゑ　江戸　加準

世の中ハたに横の一重ゑ　京　里ゑ

ゑのおれなるのもの横ゑ　梅夫

外に雀くに横の木るゑ　朱考

ゑむむし巻をてゑる横ゑ　古梁

世の中をよいむにする横ゑ　拭翠

松ゑの表ハるつく横　ゑ　肥前　恩ゑ

代士よいうゑ横ゑるゑ表し　湖中

横うら垂るの味をあくゑ　信濃　何丸

とつくうと主する横の木ゑ　武蔵　巴ゑ

鮎うちに横へ一折木のるゑ　鵬雞

花ちうなるに先さく横　ゑ　但馬　松居

迎梯にのきるゑむ横ゑ　春雄

雨をのとゑつるゑる横　ゑ　松江

をゑハうゑ嬢のさくゑ　伊勢　有我

ゑさくあれハ横ハ咲ゑゑ　小倉　無物

逢しまゑしありて横のゑ数　但馬　南苑

ゑれ出れハ又まあゑゑ横ゑ　常陸　昭有

酒ゑて横ゑるゑ表ゑ　来宣

鈴撰

さるあつまて穴のあいる撰い　伊勢　濃石
鈴音に撰のあしのこほるくて　　蓮左
鈴のるに撰見て来て老ぬる　　策兆
鈴の風撰をとて出つちゆ　　蓼亭
夜も既小淋さの美撰まのかるる　　玉屋
鈴鳴やきよ撰をまのかて　　魯堂
ありつるやけさらの出て撰ま　　定雄
ぬたれいタアゆゆしき撰い　常陸　義兵
夕撰地とらへて居るるる　　大阜
うちするるひしさしし夕撰　　冥と
木のそもと一ら出て夕撰　　李閑

夕撰

ひ光とるふのし夕撰　　学笠
友つて再ひ出ぬ夕撰　　宜麦
まのるみあまし著て撰い　　三度人
味ひつ和ひてて夕撰　　京　麦外
辞宜あひにいまて出ぬ夕撰　　角塘
夕撰ひ見ぬてこほれぬ　　草阜
淋ぬ来さして不変ん夕撰　　孝義女　文元
ひるもあつて来ひ夕撰　　壷半
ひうけ不夜撰ふ胞衣埋む人　　保吉
ひ地の来ぬあまの撰い　　木僊
人ぬありぬ夜撰咲ひ夕　　丈左

## 敬樣

有名なる敬の樣を見たるに
自古屋一人のぬるるを多樣
ゆるくと樣もてゆるる自敬
敬ハ敬のまほろしにゆ樣
敬の心佛いろ迄の人をひく
を樣意えるまねとハ楽にそ
木のそとや樣を敬の元にて
ひくに生まれ敬も樣
敬樣に人のみたん敬
樣ちるるさくに楽にそ
ちるをそれ樣のまるれ

可敬堂
仝
乃亮
丹波
陰洲
右雄
蕉岡
楼蒙
上毛
一茶
双舞
樗元
晩葉





海棠ハ梅下の樣なるにそ
嘆するもちりてめてたし心樣
人意しかとも涙を樣ちる
ちる樣気にて言ふにはまま
うちちりて多にちるちり又樣
見りそれよ橙高て樣ちる
三尺の紅鶯ちるさくら
世の中ハ樣ちり来るそれ唐
ゆくくとりてもれハちる樣
心樣人をうりてそなにそ
涙あるる涙みるにちるくと樣

仝
蕪村
白雄
仝
几董
保吉
仝
斗入
士朗
京
竟平
羅城

入おや樣ハ人をちるとゝ月ん
ゝ樣ちるゝハ人の足もんまし
ゝつるゝ花のとすもちる樣
ちれハゝて支ハ月ゝ樣ゝ
ゝ月ゝ樣ゝてちる樣ゝ
おのゝゝんゝるゝ急をちる樣
小盥もゝさゝあれハちる樣
ちゝゝゝ樣ハゝゝゝ人ハ人
ゝゝゝゝゝゝゝ樣ゝ
ゝゝゝゝゝゝ樣ゝ
ゝゝゝゝゝゝ樣

江戸
年欽
昭九
公

伊勢
椿五
樗雲
五粒
成美
可都里
樓雲
岳輪
去高



刀ゝん月ハたなゝゝゝゝちる樣
ゝゝゝのゝゝて来る樣ゝ
ゝゝたゝゝゝちる樣ゝ
ちる樣一度ゝるゝ
ゝ彫ゝ彫ゝちる樣
ゝハ人ゝるゝゝ樣
人ゝゝゝゝゝゝゝ樣
ゝゝれハゝゝゝゝ樣
ゝ樣ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ樣
ゝゝゝゝゝゝゝ

笑志
雪閑
雪樓
寛松
護物
菊也
中高
光和
樓閑
三度人
釣義

義合てたゝハ横の逆ふる気
んある人に見られて横義
船ゝきたれなりたれたるゝ心横
板にやうゝしれまて横ちる
人ゝに義てハ見ぬ横ハ
火ともは二度の気を義横
油ひきゝ人のうへゝ義横
八重横咲たるゝみ海姉
八重横とゝふる元もゝたゝや
花ゝに氣ちゝい重横
庭たゝく妻の隈より逆横

八重横

遅横

東海　流海　壺半　多流

きに　木甫
老ゝ　真澄

楚濤　春亜　道元　梅岡　几董



ゝと咲ちゝ重横
逆横ゝゝ六まゝ留を花ハ
芝井のゝみ軽さよ逆横
蛾の声のすゝ八逆横
逆横ゝゝくゝ花ハ逆ゝ風
ちゝゝゝ義のゝや逆横
逆横立ゝ花ハゝれもちる
逆横船ゝくゝ
かゝゝゝ盃ゝゝ逆横
逆横色ゝ
逆横ゝの物花氣ゝ

晩蓋　春亜
松井
蛍燭
樗素
仝
丘ゝ
仝
可塵
月居
仝

## 花

遅櫻まつちる志らゝ咲にける　貴閑
舍釈ほとり自毫おそ〻遅櫻　寛松
平畑に春てゆく〻遅櫻　紀の来岌
陶にろ〻植に出れハ遅櫻　統ほ　方舟
洲中ハ路ゑを引　遅櫻　丹ほ　吾崔
遅く〻咲て壇をすつ櫻哉　魚眠
年ハ〻ん〻てさくや遅櫻　柳鹿
酔〻来ハ天下晴ぬ雪の日　雪酔
ひく〻や花ゆ〻したゝ村の先　雨更
人ほと動くのもしまの春　晩甚
ちれ〻と折ぬ花のうれ　蔓た



櫻の中〻ゆ〻しふの中　几董
さゝしろに淋しく雨の哀　全
花ゆれゝ櫻よりゆ〻ハ春ぬ　白燈
志に洋さて咲るさ情ふ松ゝ　春〻村
花に来て志に成るいよ〻ふ　全
来てあ〻ぬ志ハ〻ハ法上戸　百地
志のゝゝれさてそんの鳴ふ　坡庾
花の木や屋赤ゝの百ふ　保岩
花の世にさりて寒さ泳生ふ　卍坡流
ハ雀やひらたく屋ふ志の　素九
志に来るゝしの人の哀ハ　六窓

横ちゆて花の色ふかゆるれ　伐青
分ひつつに志咲そめし　跨石
はほと花しるるのよりかな　仝
春て男ふ人ふ花の者を　仝
ふ入て川とそし志ている　重房
志ちりあ色の れとおりふれ　仝
あり的や答ちれる志のと　雖道
同なおそ志色人のふれ　士朝
春て知て鶯ふ花れ被れ　乙周
人老て深ふ木の志慕ひる　雖云
花にあけいふれふと言志れ　まち川



あけくれるや春ふふ花の年　有篁
花に春のふ引るや世ふ志　遲月
春そよるれ分あけて志ている　井云
花ふ月入ふふふ志にりり　白麻
春の れに花ふるのちまし　丈左
花に暮のふれまとや本源る　ノ旦
美代の人ふふ花の山　葦洞
ふるふに杉れ志ふれ山　業兆
れりひある深世志に富貴　女巻布
下ふしやもて食のしおみ　仝
冥界ふてふ春のひの梯れ　一醒

成矢　毛嶺　双札　完来　可勢里　公　公　公　鬼子

公　東塢　冥々　公　一章　乙二　公　乃亮　公　岳鈴　力岳

ふのこゝろなるめ木ハるゆ
勝えて見るよゝの春遊ひ
出ていねといいるまてをゝの有
世のうつ〻花のうつ〻に照日哉
花の戸にちあまる世のおもゝの哉
ふ宅家しさ見おまてたつ今
花ゝ原罷られなる解哉
源氏蛍の松のまゝよゝふのこゝ
仇川田に流る花に新春
花のゝ人のゆきゝ月ゝ流れ
ゝはせに花のゆく月ゝ



蓍之　江戸
養軌　秋兒
素樂　等志
麥草
魯堤
寛松
平角
宣麦
雪笠
秋兒
等志

うちゝけて人ゆるゝふの木のゝ哉
花のと春ゝにゝて志の雪し
ひと雪ゝ花ゝ嵐ゝ人表ゝ見ふ
ゝ卯を花ゝ有ゝ月ゝ散ゝ
雪ゝ表ゝ見ゝ月ゝ止て有ゝ流ゝ花ゝ
解ゝ見ゝ表ゝ枝ゝ月ゝ花ゝ心
あゝ月ゝ咲て雪ゝ流ゝ世ゝ出ゝ
ゝ月ゝ接ゝ月ゝ花ゝ
煙ゝ風ゝ花ゝ表ゝ心ゝ流ゝ
ヒねを一ゝ春ゝ月ゝふゝ上

武陵
蕉雨
樓閑

女 志宇
淺物
雨墻
同人
三庵人
仝
女 我く
吳老

八すの板歩ひさくやふの数　秋夫
花をさへ眼はなの春世をあ　板长
咲はハ花ゆまもうゆる力ゆ　義六
花のゆ道を掃やうゆ廉ゆ　文兆
花ゆ来てやうゆ来ぬ花の中　流水
也咲て様いそおゆる様をむ　麦太
花見て二朝をしき庵ゆ　共映
逢ゆ嵐やわの来ぬ花ゆ人　上東
おゆ入やふゆ時ゆゆ人様　其雲
春やゆ月やふゆ廊のさてゆ　鉄芳
ゆ門やるくゆ月もゆふの　運帆
　　作院　草角
　　麦院

春来と咲えゆふのを乳　乙鶯
屋ゆゆゆふゆ匂ゆを春の春　陸奥
ふのゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　馬人
人のゆゆをゆゆゆゆゆゆゆ　吐夫
見てのゆ横ハふと来ゆゆ　桃子
花咲て春ゆゆゆゆゆゆゆゆ　尾張
ものをてゆめゆ春ゆ　映葉
咲ふの春ゆを梅ゆ　大蘇
見てたゆやゆ力ゆゆゆゆゆ　可友
ゆるのゆゆゆゆゆゆゆゆ　安義　三花
花ゆゆへゆゆゆ歌ゆ春の月　武州　五百龍
　　陸奥　吾友
　　陸奥　菊路

花の行方にいとゝき侘ぶる　筑前　麦吾
てゝ春て翠ていふに長々　陸奥　芳外
奥しや木も代後に花の中　筑後　駱兆
花のゆ初てゆをゆるん　江戸　江戸
你お春のゆ言花にのゆ　　子阜
ひとゆのゆ形のい来れゆの霊　筑前　孤風
ちゆるも世勝れゆの後　　来光
花の牡丹第一人の見しや　　麦光
おゆ乱と小松ゆいぬ花の中　　綾光
蛙しゆのゆ春ゆいれゆのと　　椿鹿
ゆれ子廃軽ゆるゆを振ゆ　　月芳
　　常陸　杜年

○百卅三

花歩

花を出て板へ乗て行ゆ
こゆゆと行もすゆや花の時　　紀伊　流帰
見しお春ゆる花の行　乱　　宝田　城石
花のゆいゆ前へにつゆすし　　機二
ゆて世にそすゆゆゆゆの鹿　　馬逸
木の月ゆゆ　　　　　　　　　　養蝶
花のゆてゆこちゆいたゆ中　　左節
人に世ゆゆゆ中ゆ歩ゆ　　成美
ゆ歩機の花ゆゆゆ　　春亜
ゆ歩ゆゆゆゆゆゆゆ　　樗叢
ゆゆの月ゆまに二度し花歩　　公

ちまの風うたれ咲るかすみの花雲
小さまさて流石に雲の雲
白妙に耳つ荒れそめの雲
雲雲月みれわくよりて朱に
おのかさうるかの名をそ雲
雲雲して道続る人れ良
雲雲人るみなくちまりて
瓜先の雲くくそのの雲
義経や村さるる言も花雲
何者の雲あるしの雲
及古実に出やそれの雲

花雲

成英　成扇
普成　乃風
芦鏡　亜流
槐市　石河
素琉　富原
卓池

○百卅四

花雲

花雲

花風

湖水に映りしの雲
花雲をのけてよりそれの雲
雲の肌もうちとけつそれの雲
雲の本さそれ花雲月雲
沢鶴の肌まもうつるの花雲
月出て花の雲とかにそのの
花ふく雲風ハ花月雲の雲
耳かいて吾雲本雲も雲の風
雲の張る雲のあるし雲
花雲風石和りれする雲

湖水　応ゝ
乃義
冥月
晴雲
護物
巴山
喜多
秋峯
絃洛　其成
周之

花雨

花雪

花雪吹

花見

上臣

重厚　昭九　淑江　素郷　魯原　横雲　義仁　かなう　乙二　学笠　春村

○百卅五



かしらもたれて寄りゐ八百
屋かりて縁うつまるもたれ
春るりの花ゆたる一本ゆ
れ　花ゆたる木花に春の出来ん
十二三日持ちつかれ花ゆたれ
新しきの花貞に花ゆたれ
花をゆたてあるおのまい花ゆたん
花をゆたに来るゆをゆたるゆ
起ゆたにおゆたる前の菜汁れ
まゆたにおの花ゆたの月
死ゆたとゆたるゆ人ゆ花ゆたれ

儿童　公　貞青　秋雀　斗八　乙因　青阿　鉄仁　士朝　公　春亜

金の春を二度見るもの木のもと
人の歌を持るもの見の雪踏み
うゆくと思ひて庭の懐
嬢の去似して市の賑ひ見れ
花を見るにハ新しきもの見て
家のうれしきもの見れ
花ハ見るものにして色ハ
花見てなにくるの見ぬ
ある方の月ものめでもの見れ
嬢人を打ちられて花見れ
何なるの業にて花見る袖の上

晩九　陸奥　下野
桂五　南濱　尺樹
成吳　胡準
業居　支子
乃竟　力居
菩三　其雲
廿汝　青蘿
樓閣　青川
掬月　士朔
卓池　乙二
一本

折花

花も

すぐれや花見酒の星の光
かるくと見てあるもの先も
ひを言ふ打にかさて花見れ
花を見る屋をし八重春
詮分てそれ折れつ庭の花
花折て打ちめ枝へゆれのり
花のをくるを志め先れ
花ちるも分をたへるり山野
きくやちる前の新一弦
花ちるも不ゆ法ふ田の片先
花ちるや根ハ汝ハ八重 樣

晩牛　南濱
胡準
支子
力居
其雲
青蘿
青川
士朔
乙二
一本

## 菊花

花さかりみてゆくほどに
花さかり折ちかくなる気し
花さかり夫は如老ぬ空しなる
河古久屋のさし葵振ふ高花哉
祇や清や紙に流を振りかな
菊花やおれて去れぬ人の良
儒箕に高花をうくる流れ
杉の間に高花をたむけ風
菊寿るをむかへて元日祝
よもちる花ちる月の秋動
ちる花に杉のみをうる流れ

○百卅七

清泉
快芸
桑場
奇村
公
樗元
青蘿
五明
士朔
垣九
長翠

花の弁のしちれをあつふく
大きさはそのそのの花の先
ちる花や第一メ歩ル石の上
笠に花ちるるうち雪の市と
入に花の一度ふる流れ
流れより人の寿る花の
花ちるるふはいよく生るく
なくくとんあつけ花のちる
菊花に押へつけたる蛾人
ちる事をたゝへ花をいとわし
花ひてれに後ちつんうし

成英
樗青
巣兆
三歓
青蘿
乃光
青郷
木河
長高
甚成
学笠

ちるまを花ら笑てえ　し
ちるもやらしもタ暮ぬる笠　信徳
ちる花やとうゝ咲きうへの事　柯長
ちるそ今をもれんをあてらよ　菊也
ちるものあ　さもあまれる和泉　志宇
ちるものうるゝて嵐むあるる泉　似藻
花花に一本にもまる深しい　統治
ちるふや小雨ふるゝ　双鳥
花もに風月乳の深ふ　遺英
ふれもしもれや花ちるゝ　視月
ちるふや仏法ゆう笠のうへ　羅孔
　　常陸　女　黄七
　　孔汲



## 桃

ちるもハ酒のさまるれる品　文卿
ちるもや硯もものする孔み上　京　春四
ちるもみ流やるおもの日ゆ　梦節
旬ゆもうゝ流ゆしや桃の色　樗良
白桃やもせけるう籠の下　柳居
咲て春て生てちるか平桃の色　奇、お
商人を吹うゝ桃の花　公
桃の実ものあるものうり　閑更
花ハ色とうゝ色ちし桃林　蛟葵
心里や桃にうけるう法　青
うちてもきまを刻桃のる品　白雄

曉や人ハさくらの桃の蕾
綱を切流すあやの桃の蕾
夕折たる桃とり分けるさ弘
さくらの戸にさくる際ハさし桃の色
表の事いつてハ桃の花見弘
切株の桃はいつと答こゝろ
春浅き山の桃花の色
桃さくや高あちこちの向こちらの
さくらの花ハ桃ハ桃の花
にに深き迎れ入り桃の花
一時に春ハ起てゆる桃の花

○百卅九

合
凡董
保吉
五明
大江丸
昭光
樗堂
春濃
沙羅
東大
塘雄

雙美

春之光
合
菊之
一草
雪雄
雪笠
江戸
丈河
春岡
雄岡
伊勢
子規
康古

御さくらの桃ハ高中の桃の花
ゆの花厨手深花も強き
あるさくらの花ハ桃の色
さくも暗ひて桃の色
人の身にあれハ桃の花
桃にうす月ハ桃の花
厨ともさくれ桃の色
ほのぼのとさくらの桃の花
折てゆる月ハ桃の花
舟よる夜ハ桃の花
桃の色折れ逆にあれしく

## 梨花

おもてはれハ雨や梨の花　優花
ぬしうら見よ雨の樹と梨の花　星清
白さしや枝の黒めをかれの花　釣月
柳の色笑ふ人ぞうれしかり　三河　樣老
いとる風ふる梨の花　茶延
女子童の花とうり梨の花　林鹿
梨の花ちらでこれ見しまき　安藝　蛙み
常ちは雪ぬ絶て梨の色　晩蓋
梨の色力ぬ書よ心女あり　蕉村
牧白や簾ちるる梨の色　白雄
うれしなや梨一本ハ花ぬ　周更



梨の花　技ぬ梨よりやなしの花　蘭英
微雨ぬいとよりやすり梨の花　遊戸　以友
ふる涙ぬ梨ハ花　保古
酌のぬ月ぬ梨ハ花　松井
ひて時白ぬ梨ハ梨の梨ハ　完来
梨ハ人人ハ人ぬ梨ハ色　祥禾
雲月のつるまるぬ梨ハ花　塊前
押ぬて花ハ花ぬ梨ハ　優花
なりの月ぬ廣ハ梨ハ花　子影
ぬ人ハ人ぬ月ぬ梨ハ色　拾甲　光亭
注ぬ月ぬ梨ハ花　可友

海棠

一ツ木の十五歳にて事に死
事に死たる死嵐のくれ星
河棠や灯ともしまれる籠
河棠や寂しくれて来るまくれ
河棠や淋しき寒さる折枕
河棠や乗へきき花みを
河棠や男しらて寒の淋し
河棠や世にあらて死の条
河棠に出くや思案をきて
河棠に出るを思ふ胡弓する
河棠やうくへ力なし

上総 梅史
陸奥 一二
陸奥 周栗
陸奥 蕉太
陸奥 蛍茶
陸奥 五明
陸奥 吐月
陸奥 ふか賀
陸奥 枝也
上野七夕 太節
上野七夕 鞍丸



辛夷

鐘ふ一羽起て辛夷の香ふ
木末ふ出るに辛夷のふくれ
ひらいまくふて来る辛夷ふ
光の人に何まめ沢に辛夷さく
義経に見せゆるふ咲ふ
一日いまくすれ辛夷ちれ
旅寝みをるれてつしふ
つし咲て汗ふ星に飯ふ
今夏に等ふるふ咲ふ
居に出ふつし咲ふ
星いふも搗き出すんつし夷

鄭蜀

白樓 会
乙竜 湖中
陸奥 吳竜
上田 蕉太
蕉太 村
白樓 保吉
大津

乃麦
素槃
出爲
表了
寒松
常盤
寄閑
四人
約束
晩菊
蓮左

白燈
公
几董
成書
百明
保吉
公
五明
斗入
春湖
猿左



## 山吹

本つゝおの来たるまつたし咲
はたてかハるまゝ清し山つゝし
畠〳〵ハつゝしに移る畑辺哉
つゝ丸て流るまゝの山と西行
つゝ〻に捨て産まゝと西行
庶汁稱やつゝしうつて山路
色の〻〻株も結本のつゝれ
折すと素しよ高て折つゝし
寒根にたゝる音たゝし夷
いま汁に八重山吹みるめ哉
山吹や鶯りまゝに暮てゝ

山吹を嗅折出出移哉
山吹や寒〻かさし此うち車
山吹やさし西めるを出の渡
疑をにかゝるハふ此ふ中此
山吹や高しうけさる枝先
山吹みに折に安おたをめこ
雨此色八重山吹此深る寺
山吹ハ折て也ゆん　山　流
山吹にたゝ雨此ふる山田
山越の時雲棟に立〻哉
蕾の前山吹折て長にゝ

山吹ちれはそうてよ青田すし　昭丸
山吹や糸てつり出す人形に　有山
山吹に手はやとるわ地生　樗雲
山吹はあるる時すしなみ出き　巣兆
山吹やいまた横の人通り　一草
山吹みな皮にぬる地れい　素樂
山吹やふたに梅の乳ぬし　爽松
手のいきあはやゝ山吹の雨ぬ　樓雲
山吹を濡れにする乳太舞うき　渡花
山吹や俤いにくるみ　雨塘
山吹にはるるあるあるあの春　星清



山吹や芋屋の屋のある鱠の泡　上巻　康古
山吹や源の嶺ひいよあるし　湖井
山吹や麦畑なる麦の小麦　赤穂　松蘿
山吹の手のいるつに咲たるか　紀州　可文
山吹ハ見て来ようかもと先も　赤穂　左宗
白のうけや古井に木瓜の咲ぬ　保古
ちりまてなる木瓜の咲ぬ　乃美
木瓜に卧て居たるすし　双湖
居蕉するんうんうに沈了に　麦岱
沈丁ハ良にたるくる屋の　三度人
子に議る田畑なる木蓮花　半外

木瓜花

沈丁花

木蓮花

桜　花
庭　撫
李　花
連　翹

ちらくと木蓮さくら白ゐ
ゐる桜花さきて咲て美洲し
家隆人名も人ちらし庭撫
李咲や賢きる女位ふかく
ゐて花枝さくもち咲すり
連翹の花こいるの尾にゆゞれ
ちらくさむや連翹の白小事る
連翹の黒ふ花屋ぬて花の時
ゆ蕊の連翹咲花の磯
連翹やうしけいかけ花さ
連翹やちつる家物ゐる華

大阜　常盤
諸九尼　成美
右蜂　月居
等花　春帆
常盤　洪水庵
春人



連翹の花咲ゐたるかたちの
連翹ハ年のくれに咲ちる
連翹にゐるれやゐる月夜ゐ
ゐる酔木　支離庵
撫　花　古桶や二文撫元花の咲
五加木　凡也ちは家庭ゆり拘杞加木
撫　草　家ゐ八ゐるも撫を咲ゐたり
撫　麻　引家のはいゐて凡ちの撫麻
はとゐ　ゆよゐるゐるゐ死ぬるの時ゐ
妻ゐるゐ母ゐるゐゐ咲
ゐゐ花持ゐ物ちゐ書ゐ

泥水　素堂
古節
支離庵
恒丸
加賀　一茶
麦丸
陸奥　之及
乙丸
越前の　向鐵
樗良

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小松ゝ小松よりの葉うゑ
葉こそ人葉うれ小松ゝ
ひろゝひろゝよりて葉
拾ゝれゝゝ葉ゝ葉
あゝゝゝゝゝ葉
ゝ代のゝゝ
能ゝ能ゝ白葉
葉ゝ松ゝ
位ゝ位ゝ葉ゝ
連のゝ葉ゝ花
ゝゝゝゝ花葉

九化
素雄
菊三
平角
鶴風
鶴嘯
優鶴
ゝ
越後
越中
越前
有三



## 菊花

葉ゝ枝ゝ枝ゝ
ゝ枝ゝ枝ゝ
ゝ葉ゝ
ゝ葉ゝ
ゝ葉

青麦

二月大根

二月菜

若葉形

春菊

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春の色有こそあまの匂ひ
春咲て尺くるゝいつれ枝ぶり
そのいはぬ人もまこと春のこと
始てまこと春ぶのたよりに春
そのくへ入てくるゝ春の色
春ゝ敷松浦ゲてたてゆくる
ひとり春の色ゆゑ
旭の明ぶ此ゝ春咲ゝ
新の春ゝ中にうこゝ
咲ゝて老を月のゝ春松の春
秋の事ゝ春ゝ春の色

春城　蕉風
春雪海　宛松
成矣　麥亭
手心　護物
祥禾　菊也
月紀　老阿
見竟　星潘
魯原　志宇
尺文　秉紀
岩岡　文角
雪笠　演藻

春の色深ゝ春ゝ咲ゝ
山ハ春にいゝ春ゝ
雪ゝ物ゝ春ゝ
春咲中春色様ゝ本下春
春の色新ゝ春ゝ
屋ゝ此自ゝ春ゝ
序ゝ春ゝ春ゝ
春の咲ゝ春ゝ
向春中ゝ
春の色松ゝ此ゝ新ゝ
代深蛙の拍ゝ春の色

蕗ちゝ　もみ紙のうら　ほと
延帋にゆもあり　見ゆれ　蕗みも
蕗ちりて　ちりて　ちりぬ　ちりの後
白蕗千代　千代　ふる　天の河　江戸　巴人
竜雪　雪　雪　雪　雪　雪　雪　雪　越後　徐英
拙を　拙　拙　拙　拙　拙　拙　拙　右之
かゝるみけて　見ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　名古屋　古猿
鶯居て　居て　居て　居て　居て　居て　居て　居て　夫山
その　その　その　その　その　その　その　その　梅樓
月代の　月代の　月代の　月代の　月代の　月代の　月代の　月代の　百尺
蕗や　蕗や　蕗や　蕗や　蕗や　蕗や　蕗や　蕗や　白樓

生初　蕗生　蕗生初

生初る　蕗よりそうつ　紙
蛇穴を　蛇穴を　蛇穴を　蛇穴を　蛇穴を　蛇穴を　蛇穴を　蛇穴を　江戸　升丸
蛇穴を　蛇穴を　蛇穴を　蛇穴を　蛇穴を　蛇穴を　蛇穴を　蛇穴を　成英
田蛇化成　田蛇化成　田蛇化成　田蛇化成　田蛇化成　田蛇化成　田蛇化成　田蛇化成　五明
麦　麦　麦　

引鴨　義　玉河

撥　鯛　正成　胡準

物　紀　河内　傾凡

為　鉛　其桃

春　砂文

柳居

蛍光

芦雁

春歌　清水　奇測

長作　長服

乃慶



別　乗　白雄

春　景　丈左

春　風　遅柳

道光

撥元

多碎

几董

仝

代

陳貴

義松

春の人に白の見えそめ侍り　大江丸
夾白や菊を挿さしたる　加賀　梶之
庵ふるふるおのれ夾の白　越中　季布
神ふるるかぬれあるしの夾の白　賀　杜菱
河尻にて春の白見ゆる　綺石
春は白春ハ春をみるはるの　斗の
春白にちらしまぶ人と拾ひ　仝
春白にぬれてはるとも移　右亜
志ゑれ春をそのそらて夾白　松兄
春白は河白ますかいつる　祐名
春白や春の白仏なる名ま　甫尺



春白や頭巾春の頭巾　仝
春白や晩ふれハ松の春　奠た
春は白祝ふてその春　仝
春白や拾ふ春はしし　晩蕉
河晴て春白ふる拾ふれ　向燈
岩元ふハ岩はこれ春の白　岱春
ゑハ春は白ハ春をつ夾白　仝
いまは春は春ハ春の白　仝
春白や拾ふ春の祝第　保吉
春はふハふはるはの夾白　仝
人ちゑ堀のふゑの春白　斗入

春日にせかるる板ゝれ　士訥
春日やうるおひたつれる　春城
春日にぬれるるしのゝ雫　長翠
雪のゝるゝ日や二月の雨の日　本僊
春日や簑を捨て詩洗濯　巢兆
傘さして者ゝ春の日　沙羅
大きゝに除日ゝの春の日　甚躬
うち見やるゝみやこや春の日　年人
春日や親ともゝふる屋の松　丘言
仏保姫のきゝんと春の日　端雄
春日や本の月にゝ海ゝ見　乙二

河内

本についてゝ春の日　冥々
氣ゝゝゝゝゝ春の日　玄蕉
老ゝゝゝゝゝ春ゝ日　岳猪
かゝ器ゝ上代淳ゝ春の日　平角
春ゝ日ゝ春ゝゝゝゝゝ　一茶
紙ゝゝゝ垣の蝶ゝ春の日　公
春日に大ゝ伸する人ゝ　力居
春日ゝゝゝゝゝゝゝゝ　梅佛
月ゝゝゝゝゝ春ゝ日　堀義
春日ゝゝの春ゝゝゝの山　東卿
春日や老ゝゝゝゝゝゝ

春日此ゆ西路と云ふなり、　代匠　源江
る此尾につゝて春日あり
深あり　春や　樓崇
春日や　河に　養北
春日に　初れ　陸奥　霧起
春日や　望あり　麓青
春日　此の上　魯陸
春此日　井の　越に　万和
春日や　いつ　ふる　春の　江戸　南湖
春日や　兎　ハ　此　夏を　鶴の日
春日や　今　ふ　の　此　あり　三度人
春日に　う　つ　に　花　忍ぶ　灯　春雨
卓池



春日や　水　深　お　井に　庵　此　樹
春日此　井　う　ふ　る　心　春
夕　春　此　清　ハ　て　ハ　地　春　此　日　丹波
春日や　う　の　春　う　春　此　日
春日此　春　此　や　あ　や　う　ふ　春　此　日　梅雨
春日や　掃　め　古　春　此　上　に　清　漫と
春日を　此　の　て　来　る　り　春　春
春此日　春　此　い　き　つ　り　は　む　丹後
夢合て　春　帽　子　此　て　く　り　春　の　日　大江
春此日　日　と　く　く　水　来　春　左　丹
春日や　て　春　の　春　と　海　松　波　き　雲　伊勢　渭川
有斐　廉地

春の人

旭の明るくハあるし春の日
見やとゝ人ゝるる春の日
先ゆくも物ゝるれ春の人
るるも暮るるもあれ春の人
たゞ佩しほや春の人
春の人ハ路の子帝とゝれる
手の云れすゝとゝれる春の人
又ひとり春の人ハ市ゝ人戻る
ひとりを飽すゝる春の人
春のひとりしるゝ春ありて田ゝる
帰るゝとゝもれゝるゝや春のゝ

春の日

春の日ハ春の日
ゝ人ゝ春の日
ゝ人ゝ春の日
ゝ人ゝ

雅元嗜八てめてたくゝしのもと　陸奥　南山
百姓の寺ふる越ゆくもの山　　力化
もの山ゝたゝ高れハ屋の屋　　おいの
屋ゝに越しハ越しもの山　　乙二
詠ゝて寺よゝのもものの山　　公
屋ゝに山ハ山ハ山ハ　　雪樵
もの山ハ山ハ神ゝよゝ　　蓋角
十ゝゝひゝゝゝゝもの山　　光か
詩筆のゝおれ一りもの山　江戸　兼石
沢ゝゝゝいもゝゝゝもの山　　漫て
引ゝて枕ゝゝゝもの山　伊勢　翠川

春雨

人信八墨しやもんゝゝみ山　　湖井
もの山死ゝ花葉れふゝめし　　鬼平
ゝゝと春八泥ゝゝもの山　　百非
春雨ゝゝゝゝゝもの山　常陸　一止
けしおゝゝゝゝもの山　　木和
もの山かゝゝゝもの山　　孤九
せをいゝふゝれおれて人ゝ　　路一
もの山ゝゝゝれれもの山　　七節
降海に悩ゝゝ山ゝゝ猫　　鬼孫
もの山ゝゝ花ゝゝ　　向楼
もの山ゝ花つゝゝ親ゝ　　七翠
もの山ゝゝゝ暮ゝ　　爽松

## 春海

春雨人を思ひ美人を思ふ
春の雨に焼く野の妻
美人焼く春の雨
黄気に春の池越て来る
帆柱に帆の力入れる春の海
春の雨何に春つまる人一里
春の雨孫の子の子の子
はるに春の海かるる春の海
ちる花のゆれ浮る春の海
花散り来る帆や春の海
ゆを連て遠の浦々春の雨

有化
由之
柳廣
仲南
夏た
晩春
春杉
几董
花縣
年人
不寒



## 春水

雨と見てゆハ入れる春の雨
春の雨はおすまてにとひる
うるくと路の中のて春の雨
春の雨に流れ出る
傘の柔れやもの雨
山のをふいとうれや春雨
春のれいろ春色を流れる
はうてゆ美人すると春の
蛇をとふ鶯の春ひや春の
源ハ梅うる〳〵しまみる
柏芦の根ゆ春らくと春の

百池
柔机
夏松
浸く
ふ新
力美
夏杉
公
公
夏た
雄美

久されハ御殿ゟ出ル事の礼
儀ハ小松殿の中と事の為
事の為の廉那の婚姻ハ何分
うとく〳〵なるのゝ心ハ事の為
良に自へ松つけたる事の為
事ハ事ハ本ハ事ゆゑ事の為
鳴り事ハ事ハ事ふつう事の為
二節の御祝を言今ハ事の為
いとふりて様ハ鳴起ハ事の流
起る事流ゝ事ハ事の為
事の為の酬事ふ事ハ事の為

儿童
会
向雄
焼芸
保吉
石蘭
狂九
鉄砲
七翠
百雲
樗雲



婚人ゝ為ハ事ハ事の礼
ハ事ハ事ハ事ハ事の為
ハ事ハ事ハ事ハ事の為
抗うてハ又ハ事ハ事の為
鉄砲の中流ゝ事の為
ゟる事ハ事ハ事ハ事の為
小男廉ハ鉄砲ゝ事の為
樗抗に来て言事の為
抗芝ハ事ハ事ハ事の為
事の為ハ事ハ事ハ泡
ちよゝ〳〵と先ハ事の為

外伝
芳之
永吳
会
華泡
双託
完来
年仏
茅屋
百雲
月化

夏傳

来友

友近

[illegible]

[illegible]

[illegible]

# 行春

[illegible]

一茶　雨塘　秦嶺　兎卿　真光　蕉雨　公

八拙

[illegible]

伊勢

燕尾　几董　五角　白梅



[illegible]

樗良　蕉雨　公　几董　公　岱志　恒丸　百丸　樗堂　道堂　菅三

とりあへわたるの表やきたる
りきたに出てしはるるんれ
りきやかれたるはきつん
りきを植たるとうまるきし
りきやかれくて芭の丈
よい連のやうにりきあさうう
りきたる麦にうれて住白うり
りきや牡丹ようつる人ん
りきやうるうる人ん
りきや湾り指し市の人
りきやかれたれて光の人

晩蕾　江戸
百姓　文周
保吉　大江丸
也有　摘ナ
こ李
二柳
斗入
存亜
有こ



白藤みどれて茶色の茎ける
秋〳〵ハ立きり萩ハ
りきをあれむ外のの乳ル
りきやこ岩みた立きり
足ら広木うれてすのり表ル
りきやこ木まれてりうれ窓
よしきうまこる人ふうれたり
りきをうはれてめうり外の蘇
りきやかれ話の巣きのたくり
りきやこ脊戸ハ立て麦の雨
りきたれ処や負ちんきの高

陸奥　巾羅
士朔
公
有釜
魯墓
巣居
成英
車大
可松望
乃麦
冥こ

りまの江先生の海辺に
ゆくまを咲いており杜若
りまの先にて立ち咲の松
りまやいつ国をさわぐ小田の蛙
ゆさゆさとまりてよのへみそ
りまを郭公ふる若のもく
りまをちらちら併さし
りまの水うら見ゆる山路に
るのり未まのり未も似ぬ
つちらして山の村に
りまやおの似る岩のを

堀義
魯原
桂雲
雪樵
一茶
雪笠
雪岡
北鳥
雄岡
瑞雪
漫し



りまのけらるわるるの
りまや彩いふ
りまのこれをるれ笛の孔
りまやタ波るる山みち
りまに咲る桂みち
まのいちるる吹のうを
りまや橋の未るる
これ
りまもるるとの
りまや芋し浦の松
りまや漁家合に海蛭

陸奥
道寸
亭人
文樂
海樂
幽嘯
冥也
出羽
仙風
秋文
共成
能登
樽翠
泳海

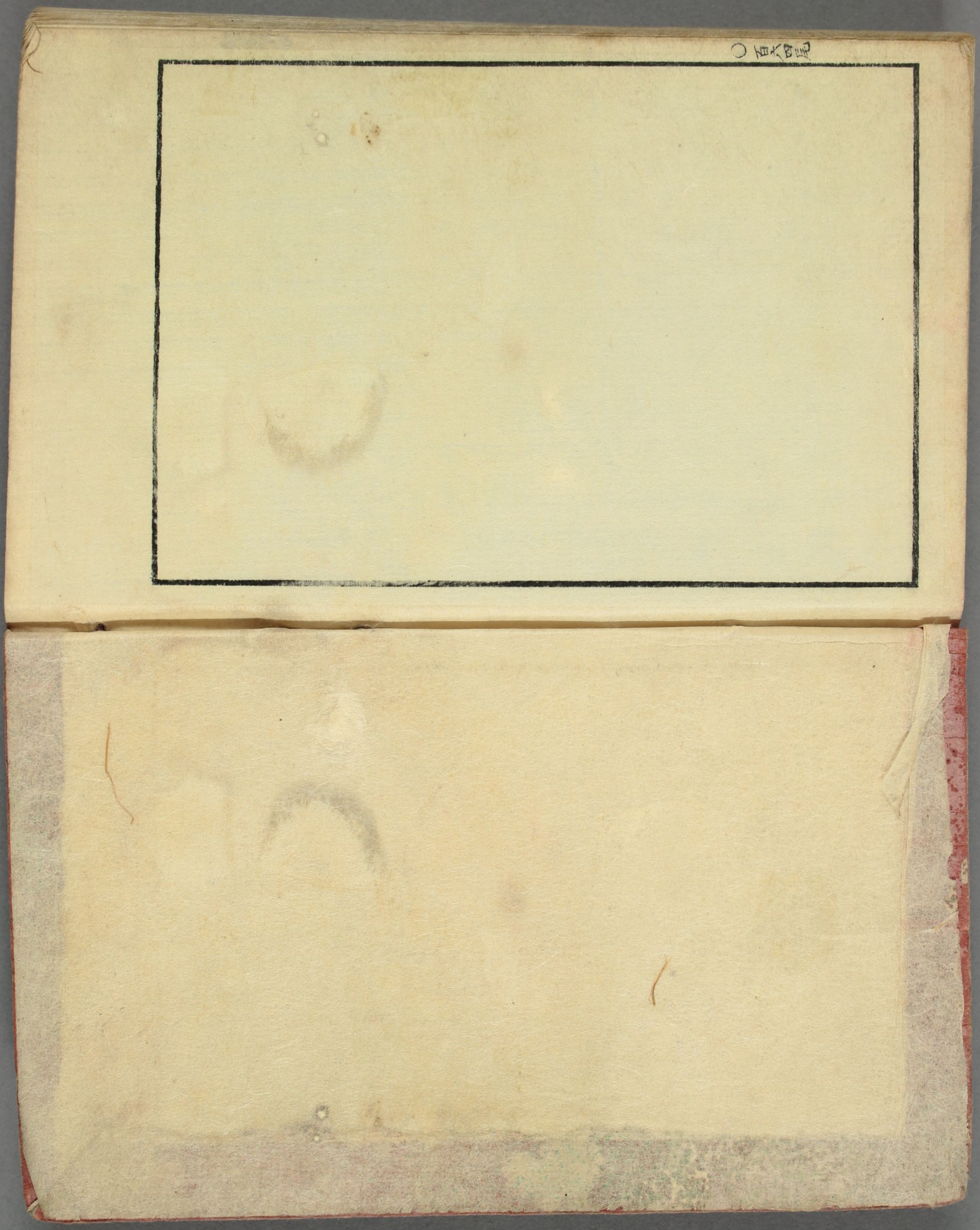
三月尾

春雜

りもとの花ぞ春の名残り　阿波　弓槌
りもやぬれて滝の音　武州　東雀
りもやぬれてもまだ立ち　越後　祖竹
見ぬ人しらぬ美みんやものり
三月みうれてりやつの海　安芸　沖南
まるめ蝶ハ春のハまれ蝶　江戸　梅岑
寒梅ふまの巨樹の春気
月色と接て見る春ハ花の風　続石
花ちやさしてもはふくりこ　士朗
孔雀にうつり来てり雪れ　仝
戸を明る春ぬるやぬの色　斗入
柳荘

荒波や大きあるぬの矣　桂五
雪とりと柳巷の春るこよ　布舟
柳柳変ぬて来ぬをりれ新　陳六
ム吹に連翹ふしつく　有ム
弧柳て消ぬと取ぬやぬの雪　升六
柳柳春の同巣とるる　菜尻
春て起てれるしれや春ん　乙二
ふとム春りて行江ル　仝
久しふり云てぬふや柳桂　道竟
りもして一ぬ又柳の春四ル　一茶
春の巷れそ行ふ春ぬし　堤前

多の時一百法れを巳れ　力化
夏ゝの春ていつまで蔭てし　粤張
梅柳世ハ未ゝれてらるゝ　梅閑
春ん赤すしうやよう　松石
ちるまのうゝきまの雪白　瑞子
発ゝれに出る不名ゝらゝの花　魚文
学と性ゝあれを春の　旅
春の雪梅のしてり匂ひう　倚風
学れ有の変さよ　梅　れ花　石流
春のうゝい人やつゝる春の清　詠内
知うまんゝれてゝし魚の月　吉丙
郁笑



梅ゝうゝけゝる春の新れ　杜由
夏ゝの春れ春しゝし　陸奥　夢南
ゆゝの春らしゝる小百れ　雪　富春